
イチの魔法使い

真実の語りべww

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イチの魔法使い

【NZコード】

N1784M

【作者名】

真実の語りべww

【あらすじ】

生まれて、不運なことが魔法を行使することのできない男のこの悲惨かもしれない物語。主人公は、原作の強い人達（キュルケ、ルイズ）などを嫉妬の目で見ます。最初のほうは嫌っています。それがだめな方はヒターンしてください。7割が作者の妄想です。そういうのもだめな人はヒターンしてください。

序章～これが僕～（前書き）

この作品は、作者の魔法の勝手な解釈があります。そここのところは許してください。できるだけ分かりやすいように解釈しています。まあ、作者にしか適応しないかもしれないけど。

序章～これが僕～

僕の名前は、ルーラ・ルイ・ラーケ。今年、このトリステイン魔法学院の一年生になつたんだ。

生い立ちはいたつて普通だつた・・・ある一点を除けば・・・僕は魔法が使えない・・・

序章～これが僕～

魔法とは、自分の精神力をつかい、魔力子を操る技術だ。そのことを知つてゐる人は少ないが・・・

そして、魔力子によつて、効果が違う。例えば、火属性の魔術の魔

力子は大抵が発火能力に優れた魔力子だ。

鍊金のときには、魔力子は、原子操作を可能にした、スーパーにす
ごい魔力子だ。この世界の人は原子操作をこんなに簡単にしている。
そして、コモンマジックのレビテーションなどの魔力子はただ物理
干渉ができるようになるだけだ。

しかし、僕は自分の体から魔力子を飛ばすことができない体質らしい。
貴族に生まれても魔法が使えない。

そう、コモンマジックすら使えないのだ。一つの魔法を除いては。

その魔法は『ブレイド』と言う魔法だ。魔力子を自分の杖に集め、
それを高速回転させることで物を切る魔法だ。

チーンソーみたいなものだ。この魔法は自分の体から魔力子を飛
ばさずに済む唯一の魔法とも言える。

だから、僕はコモンマジックは使えないともブレイドだけは使えるよう努めました。

ブレイドを初めて早5年ぐらい経つ。5年間ずっとブレイドだけを磨いてきた。

元々、僕の精神力の量は一般貴族の平均を下回っていた。だから、一日にできて5・6回が限界だった。

しかし、ブレイドは一回出せば、大きさを変えない限りは精神力を使わないのだ。僕にはピッタリの魔法だった。

そして、今年僕は魔法学院に入学した。

もちろん、魔法ができないから魔法の勉強など一切していない。できないのだから、する意味がないのだ・・・なんだか言って悲しい。

希望も何もないのだから、勉強するだけ無駄な状態なのだ。できて進級に必要な程度だ。それ以上はないし、いらない。

元々、僕の家が変で、この魔力子の話をするのが好きらしく、3、4歳の時に聞かされるのだ。

魔法がほとんど使えないメイジ。貴族と書いてメイジと読ませるこの世の中だと、僕の居場所などごく少数しかないので。

そんな、ことを考えるとこの学院でいい学院生活がすこせるかが心配になってきた。

そんな、不安を振り払つゝ、頭を振り、僕は学院の門をくぐつた・・・

序章～これが僕～（後書き）

以後もよろしくください。これからも読んでください。

第1話～僕の生活～（前書き）

次回は召喚ですが、"i"都合主義で、召喚はできません。

第1話～僕の生活～

「朝ですよ、ルーラ様」

朝の日差しが差し込んでいる。今日も朝がやつてきた。

「ん・・・後5分寝かして・・・」

「どうせなら、ずっと寝ていいよ。

「もう、そんな事言う人はいつも5分以上寝るんです。」
と、言って布団？シーツをはがされる。

「寒いよマリア・・・わ、分かったから、服を剥ぎ取る?としないで!」

と、言って部屋の外にでてトレード朝ごはんをもっててくれる。

「朝ごはんですよ。」

「ありがと、マリア」

そう、僕は食堂で皆と一緒に朝ごはんを食べない。ささやかな糧とか言って、朝からものすごい豪華な食事が出される。はつきし言つて僕は朝はあまり食べないほうだ。それに・・・

第1話～僕の生活～

マリアは僕が実家から連れてきた専属のメイドだ。昔からお世話をなっている。僕より2・3歳を取っているせいで、昔から姉のつひめの存在と化していた。

朝ごはんを部屋で食べ終わると、僕は授業に急いだ。授業といって、俺は何もしない。勉強は進級できる程度できればいいのだ。どうせ使えないのだから。

授業なんて適当に聞いとけばいいだけだ。

「はあ・・・」

授業がつまらないすぎる・・・

「ミスター・ラーク、私の授業はそんなにつまらないかね？ 誰だっけの先生？ ああ、ギターか・・・

「ええ、とてもつまらないです。」

素直に言つべきだひつ。

「君はこのようないふことをしてこるからあのような一つ話を聞くのがいいのかね？」

「は？」

「そう、僕が朝ごはんを断つて別に取る理由。僕はバカにされるのだ。

「それはまったく関係ありませんよ。そして、あなたに言われる筋合ひもあつません。」

「まっ！ 先生にたつづくのはやめよ』『单一のルーラ』『单一のルーラ。各『单一』一つしかない。魔法は一つしか使えない。

• • • • • • • •

もう、言い返す」とかできない。その名前は眞実なのだから

「はっ！だんまりかい！さすがは単一のルーラ！僕に対抗するのと先生にはむかうのを同時にできないのか！」
なにも言い返せない。

「もういいです。」

そう、言ひてほくほーつの窓を開ける。そして・・・

「おい！何をしよう？」

ପାତ୍ରିକା

窓から脱走した。

外でのこと

「ルーラ様、また抜け出したんですか？」「マリアが現れた。

「ああ・・・・・」

「まったく、しょうがありませんね。」

「ありがとう・・・僕の味方をしてくれるのはマリアだけだよ・・・」

「そんなことありませんよ？ルーラ様が他人とかかわらないだけです。」

「他人というのが怖いんだ。突き放されると思うと・・・それなら、知り会わないほうが楽な気がするんだ」

「まったく、何でルーラ様はそこまで他人を怖がるですか？」

そういうて、会話は途切れた。

僕は魔法を普通に使えるやつ等が憎い。ヴァリエルだって、失敗とか言つてもちゃんと魔法として、発動されている。今年はトライアングルが2人もいる。有名な家名のやつ等だつてたくさんいる。そのやつ等が全員憎い。俺の努力してもできない魔法を、あいつらは生まれながら持つていてる。

そんな感情を渦巻きながら、俺の一年はものすごい勢いで流れた。

そして、それは進級試験。使い魔召喚の儀式がやつてきた。

第2話～召喚～？トライプカードはない～（前編）

サモン・サーヴァントはなぜかできます。“都合主義ですみません。

第2話～召喚！？トラップカードはない！～

今日は学校はない。

学校がないなら別に寝ていいじゃないかとか思つてたんだけど。
今日は、あれだ！いわゆる、運命の日つてやつだ！

そう、今日は召喚の儀式の日だ。

第2話～召喚！？トラップカードはない！～

俺は早めに校庭（？）に行つた。案の定コルベール先生しか、いなかつた。

「おはようございます、コルベール先生。」

「おはよう、ミスター・ルーラ」

コルベール先生は火の魔術師で、貴族とは思えないほどのチキンと言われている。

僕的には、人間生きてないと意味がないから賛成だけどね。

「やつぱし、まだ誰も来ませんね。」

「それもそうだろう。まだ儀式まで45分もあるからね。」

「あはは・・・そうですね。」

やべえー、30分間違えた・・・

それから、俺は草の上で寝た。まつたーりと寝ました。

44分後

ざわざわ
ざわざわ

ああ、うるさいな・・・

そろそろ始まるのか・・・はあ、嫌だな・・・どうせ、俺なんて、
ナメクジとか出しそうだし・・・

そして、一人ずつ召喚することになった。

俺の番がやってきた。

名前順に行くと俺が最後になるんだが・・・ルイズ・中略・フラン
ソワーズは召喚に時間がかかると予測され最後になっている。

俺が前に出る。少しがわめく・・・そりゃそうだろう、俺は今まで
『ブレード』しか使ったことがないからね。できるか、自分でも不
安だ。

「我、ルーラ・ルイ・ラーグが呼ぶ。我が運命を変える者よ・・・」
このセリフは基本自由だ。

そして、前にゲートが開く。どこか不可思議なゲート・・・厚さは
ない。しかし、向こう側は見えない。まるで、鏡のよう。しかし、
表面は水面のように波打つてゐる。

そして、次の瞬間その波は止まった。何かがゲートから出でてくる。

そして、召喚は終了した。

前には、普通のサイズの猫。

色は茶色で模様もなし。完璧に普通の猫だ。

「はっ。さすがは単一のルーラー。ただの猫じゃないか！ 模様もない！ 色が一つだ！」

「やい、いわむちこですよ。さあ、ミスター・ルーラー契約を。」

「はい。」

と、言つてしまくは猫を持ち上げ、顔に近づける。

「我が名は、ルーラ・ルイ・ラーク。五つの力を司りしペントagon。この者に祝福を与える、我が使い魔となせ……」

そして、俺は人生で始めて猫にキスをささげた。そして、猫が少し唸ると、治まり、僕の手の中から逃げた。そして、それをコルベール先生が捕まえる。そして、おなかのところを覗く。

「ふむ、これは『意思疎通』のルーンだね。珍しくもないが、役に立つぞ。」

「そうですか……。」

平凡だな……いや、成功できただけでもよしとしよう。これで、一様俺はメイジうことだしな。

「すこし、疲れたんで部屋に帰つていいでですか？」

「ああ、いいとも。次の召喚は時間が掛かるだらうしな。」

「あつがとうござります。」

次の召喚はルイズ・中略・フランソワーズだ。時間が掛かるに決まつていてる。

部屋

僕は今ベッドにねつころがつてて。猫と一緒に。

「うへん・・・君の名前はなじよつか?」

「ちーちー

「うへん、ショレーティングガー?とかだめかな?」

『いやだ』

「うおーー、これが『意思疎通』か・・・びつべつした。」

『俺もびつべつだに』

「そつなんだ・・・で名前はなにでよう?・スコールとかは?」

『それは、雨だに』

「じゅー、インフルノからとつて』フルノ なんじびつ?」

『それがこいこい』

「で、いつことは君は火属性に連なる使い魔なんだ。」

『「そうだにゃ、ルーラも火じゃないかなにゃ』

「はは、そうだね。珍しくもないか。」

火つていつても、僕にはあまり関係ない話だけね。

『「それにして、ルーラの召喚はとつても不安定だったのにゃ。やつとの思いでこっちにこれたにゃ。』

「ごめんね。僕は魔法が使えないんだ。」

『「使えない」というと?』

それから、フェルノに僕の魔法について説明した。

10分後

「お皿をもつてまいりましたよ」

「マリアお帰り。」

「はーーー」

「その猫はなんですか?」

「僕の使い魔だよ。かわいいだろ?・フェルノって名前なんだよ。ルーンは『意思疎通』だよ。僕はフェルノと会話できるんだけどね。」

「

「そうですか。これで一安心ですね。ルーラ様もこれで、立派なメイジです。」

「ありがとうございます、マリア。でも、僕は全然立派じゃないよ。」

「そう、俺は全然立派なんかじゃない・・・」

魔法を使えないメイジが立派であるはずがないから。

「けどね、マリア。僕は立派なメイジじゃないからこそ、ここまで逃げて来れたんだと思う。それだったら、僕は立派なんていらない。名前だつて捨てるよ。」

「それは、貴族とは思えない発言ですね。まあ、それがルーラ様ですか？」

「あはは、そうだろう?」

そして、その日もいつものように終る。

今日は、猫が一匹増えたけど。

第2話～召喚！？トラップカードはない！～（後書き）

主人公は、基本チキンです。闘いなんてなればいい、と考えています。

第3話～才人との出会い～（前書き）

更新がひどく遅れました・・・すいません。

第3話～才人と出会い～

今日は非常に早く起きてしまった・・・
その理由とは・・・

「[レ]やー。[レ]やー。」

フェルノだ・・・

「ん・・・・・・。[レ]りしたんだ、フェルノ？」

『お腹が減ったにやあー』

そういえば、昨日からなにもあげてないな・・・

「ふああ～・・・分かつたよ。[レ]ん」

背伸びをして少し考える・[レ]「[レ]に行[レ]つか・・・そつだ厨房に行[レ]う。あそこなら餌くらうあるだろ[レ]。

「よし、じゃー、着替えたらすぐ行[レ]うか。」

「[レ]やあー」

第3話～才人と出会い～

「お邪魔しまーす。」

「「」やあー」

と、厨房に入つていいくと。

「あ、貴族の坊ちゃん…マルターさん呼んで「」…。」

「こや、別にそこまでのようじやないんだけど?」

そして、厨房のほうから一人のでかい、本当にでかい人が来た。

「なにか、不憫でもありましたか、貴族の坊ちゃん」

「いや。なにもないよ?ただ、使い魔の餌が欲しいだけなんだけど。」

「やつでしたか。で、どんな使い魔ですかね?」

「「」やー」

「猫ですか。へい、わかりました。では、魚を数匹持つてきまальн
で。」

と、言つて30秒後に魚を持つてきてくれた。

「ああ、ありがと。それでは、お邪魔しました。」機嫌よー、皆
さん。」

と、言つて厨房を出て行く。

食堂横

「ほり、フルノ。餌だよ。」

『ありがたや、ありがたや』

「ふうー、朝は苦手でなやつぱし。それにしても、やつぱし平疋つて朝早くから働いてるんだな。」

ただいまの時刻は学校の始まる2時間前である。

「ふああー、暇だ。寝るわ。フルノ、人通りが多くなってきたら起こしてくれ。」

『了解だ。』

「おー、アイツ何だ? あいつも貴族か?」

「あ、アンタ、貴族に決まってるでしょー! そんな口聞いちやだめつてずつと言つてるじやないー!」

「い、いや、だつて。その辺で寝てるし、昨日は見なかつたし! こんな、会話で起こされた。不愉快だね。非常に不愉快だ。でも、あくまで物腰やわらかに。」

「うむむむですよ。人が折角寝てるのに・・・」

「あ・・・」めんない。

と、言って黒髪の少年が謝つてくれる。

「あ、アンタ！私には謝らない癖に他人には謝るのね！いい度胸じゃない！」

「そういうた、態度を取つているからそうなるんだよ？気をつけるといいよ、ミス・ヴァリエール」

「そ、そだ、そだ！」

「あ、アンタはまつるさい…」

「で、それより、彼は？見た感じ貴族じゃないね？しかも、黒髪…珍しい。」

「あ、ああ。俺は平賀才人。こっちで言うサイト・ヒラガだ。」

「そつか、サイト…なあ、手を貸してくれないか？」

「ああ、別にいいぞ。」

と、言ってサイトが僕の右手を握つて引っ張つてくれる。

「ありがと、サイト。君は優しいね。」

「はは、何言つてるんだ？これぐらい普通だろ？」

「ここじゃー、それが普通じゃないんだ。まあ、僕のことはこ主人様から聞くといいよ？それじゃ、僕朝ごはんまだなんだ。」

と、言ってそこから走つて部屋まで戻る。

あいつは優しかったな。他の貴族とはなんか違う感じがする。つて、俺名前も知らないじゃないか・・・それにしても、あいつ、食堂にしちなのに行こうしたんだろ？

「なあ、ルイズ、あいつ誰だっただ？」

「ああ、あいつは同じクラスのルーラ・・・苗字は忘れたわ。一つ名は『単一』よ。单一のルーラって呼ばれてるわ。」

「へえ、单一ねえー。なんかかっこいいじゃん。」

「かっこよくなんかないわよ。『单一』の意味分かる？一つって意味よ？あいつは魔法を一つしか使えないからそつぱなれてるのよ。」

「や、そうなのか？なんか、かわいそーだな？」

「かわいそー？それなら私の方がかわいそーじゃない？魔法が一つも使えないのよ？」

「お前は使えてるじゃないか？爆発するじゃん？あいつは何も起こらないんだろう？そっちのほうが・・・虚しいな。」

そして、ルイズがなにかに気付いたかのような顔をした。

SHDEOCT

「まつたく、ルーラ様どこに行つてたんですか？朝じはんは用意でありますよ。」

「ああ、ありがとマリア。いや、ちょっとフルノの餌をもらひに厨房に行つた後そとで寝ちゃつて。」

「まつたく。」

「あ、でも。ヴァリエールの使い魔にあつたよ。人間だつた。不思議だつたな。」

「人間の使い魔ですか？珍しいですね。」

「だらうう・もうちゅうとよく知りたいな。ご馳走様。」

「早いですね？」

「ちょっと、似合わずワクワクしてきたんだ。」

そういうて、僕は部屋から出て、教室に急ぐ。

教室に急ぐ

僕の周囲には当然と生徒は寄つてこない。まず、僕には友達がいない。そんな僕がすることは一つだ。寝る。

そして、僕はまた眠りについた。フェルノも寝てるし。こいつ気持ちイナ。

ドガーネン！！！

「うおー！」「ぎにゃー！」

そんな、感じで起こされた。マリアよりひどい！

はあ、またヴァリエールかよ・・・派手すぎるんだよー！

そして、今日の授業は中止になつた・・・

自室

「はあ、ヴァリエールもやつてくれるよ・・・俺の安眠を邪魔するなんて・・・」

そんなことをぼやいて部屋から出ようとすると、向ひのまづから黒髪の才人が走つてきた。

「おお、才人じゃないかつて、なんでそんなに走つてるんだ？」

「る、ルーラ、匿つてくれ！頼む！」

「わ、分かつたから、は、早く入れ！なんだかすゞい嫌な予感がしてきた。」

「あ、ありがとうー恩に着るよー。」

そうして、才人が俺の部屋に走りこむ、そして、すぐドアをものすごい勢いで閉める。

「で、どうしたんだ？」

「い、いや、ルイズのことを『ゼロ』ってからかつてたら・・・殺されかけた・・・」

「それは、そうだろう。・・・貴族はプライドだけで生きている生き物だ。それに、ヴァリエール家の三女となればプライドなんて山より高く海より深いぞ。」

「そ、そつなのか？ そのわりに、お前は気にしてないみたいだけど？」

「・・・俺は、貴族より平民のほうが似合つてゐるからな・・・」

「あ・・・」じめん・・・そつたな、じめんルーラ。」

「いいよ、別に。もう言われ慣れてる。」

「それにしても、ルーラはなんで魔法が使えないんだ？ ルイズだって失敗しても爆発だら？」

それから、俺は才人に魔力子の話をしてやつた。

「そ、そつだつたのか・・・なんか氣の毒だな・・・」

「いや、そつでもないよ。そのおかげでブレードだけはすぐじいからね。あと、少しオリジナルも考えてある。」

「へえー、なんなんだそのオリジナルは？」

「いつか、みしてやるよ。」

と、その後は世間話をしていくと。

ガチャツ

ビクツ
ガタツ

と、マリアが部屋に入ってきて、才人が机の後ろに隠れた。

「あー、大丈夫だぞ才人、俺のメイドだ。あと、マリアドアを閉めてくれ。」

「はい、分かりました。それにしても、ルーラ様もやつと自分の部屋に・・・ふふふ」

「お、お前のメイド? 専属とかか?」

「ああ、そうだ。メイドのマリアだ。マリアこいつちはヴァリエールの使い魔の才人だ。」

「はい。私はルーラ様の専属メイドをやらせて頂いているマリアです。以後お見知りおきを。それでは、これを。失礼します。」

と、言って、テーブルの上にクッキーを置いていって、退出した。

「マ、マリアさんか。お前のメイド?」

「ああ、ウチの実家からつれて來たんだ。一人はさすがに寂しいからね・・・」

「貴族つてなんか生まれながら勝ち組なのか? いいなあ、いいなあ貴族。」

「コイツー! ヤーヤするな!」

「マリアに手を出したら殺すぞ? 俺のただ一人の従者だからな。」

と、言つと才人は潔く『はい・・・』といつてくれた。

「二】やあーー」

「ああ、今はお前も俺の従者だな。」

「おー猫じゃないかーいいな、二】いつ普通でーにやあ、他のやつ等
はもう、竜とか変なのドジックリだよー」

「褒め言葉として受け取つておくよ。」

と、その後も世間話をしていると夕飯の時間になつていたので、才
人と帰らせた。まあ、無事を願つよ。

第4話～決闘、才人の世界～（前書き）

いやあ、なんだか感想をもらひ、とってもうれしいです。そして、
ネタがぽんぽん浮かんできます。書いているうちにキャラが変わっ
てしまうかもしれませんぐ・・・

第4話／決闘、才人の世界／

それは、突然の出来事だった。

「諸君！決闘だ！」

一人のバカがこんなことを言つたのだ。

第4話／決闘、才人の世界／

なんだか、大変なことになつていてるらしい。

なんでも、才人がギー・シユを怒らせて決闘騒ぎだとか？
はあ、あいつは暇なのか・・・暇なんだろうね・・・

才人はまだ、こつちに來たばつかで武器の一つももつてないのに・・・

貴族の名が廃れるぜい？

「あ・・・そうだ。たしか、『あれ』があつたな。
と、言つて僕は部屋の隅にある箱をあさりだす。

SIDE才人

なんだか、決闘になつた。

しかも、元はと言えば、あのギザ男が悪いのに・・・一股なんてす

るもんじゃないぞ？

はあ、しかもなんだかルイズが俺のことすげ止めよつと/oruし・・・
・俺があんなギザ男に負けるとでも思つてゐるのか？

「逃げずに来たことを褒めてあげよつ。」

「ああ、どうもありがとうござります。」

本当にこじらへんルーラと違うよな・・・貴族つてバカばっかなの
かな・・・ルイズもバカだし・・・

「ふつ、僕はメイジだ。だから、僕は魔法を使う。文句はないね？」

「はつ、お前に言つ文句なんでもつたいたいだろ？」

「あ、アンタ！何てこと言つてゐるよーあやまつたなさー！これ、主
人命令！」

「俺があんなギザ男に負けるかー！？」

「ま、負けるに決まつてるでしょ！相手はメイジなのよー！平民が
勝てるわけないじゃない！？」

「やうとは限らないんじやないかなー！？」
と、上のほうから声がする。見上げると

「ルーラー來てくれたのか？」

「ああ、そうだ、ミスター・グラモン。あなたは、メイジで魔法を使
う、なら彼は平民だ。武器を使つ許可を。」

「ああ、それぐらいならいいだろ。武器を持ってきたのか?」

「ええ、決闘とは公平だから成り立つんです。一方に条件が偏ったときそれは虐待と言つんですよ?」

と、言つてルーラは俺のほうに近づいてきて、俺に武器を渡す。その、武器とは

「つて、これ『刀』じゃんか!? なんで、これがここにあるんだよ!?」

「刀? これの?」

「あ、ああ、これを俺の世界だと刀って言つんだ・・・」

「『俺の世界』? なんだか面白そうな話だね。終つたら聞かせてよ。」

「ああ、いいぞ。お前にだつたら話しても。」

「じゃー、がんばってきてよ。」

「おお、がんばってくるわ。」

それは、どこか、日本でも味わったような感覚。まるで、友達。いや、もう友達だった。

SHDEOCT

「ちよつと、アンタ! なに、私の使い魔送り出してるの? 止めなさいよー?」

「なんで、止めるんだ？」

「え、決まってるじゃない！じゃないと、私の使い魔死んじゃうじやない！？」

「死ぬはずないじゃないか。彼は勝つよ絶対に。」

「なんで、そんなこといえるのよ！？」

まったく、コイツは自分の使い魔も信じられないのか？

「自分の使い魔を少しあは信じてみればいいじゃないか？その時点で君はメイジ失格だよ。」

「な、何でこいつのよー？あんたこそ、一つしか魔法使えないくせに！ほとんど平民じゃないのー！」

「お前、つるさいぞ？まず、平民だからって何だ？貴族なんてそんな偉いもんじやないんだよ？」

「は？何言つてるの？貴族が偉くなくてどうするのよ？馬鹿なんじやないの？？」

「馬鹿はお前だろ？これが分からぬ時点で、お前はメイジと貴族両方とも失格だ。」

「なつーアンタふざけんじゃ」

その、言葉を聞く前に僕はルイズから離れた。

勝負は一瞬で決まった。当然才人の勝ちで。しかも、人とは思えないほどの速さで。あれは、達人の域を超えていた。…
そのときに、ルイズがものすごく面白い顔だったので、笑つてやつたら、ものすごい怒つて、才人を引きずつて帰つていった。
俺のカタナ？ だっけ？ 返せよ。

まあ、いいけど。どうせ後で才人が話し聞かせてくれるんだし。
俺は、そこから、一人になるために人ごみから離れ、校舎（？）の裏の人気がないところに行く。

「ああ、寝みいな。どつかで、昼寝でもするかな？」

「いやあー」

「お前もしたいか？ やつぱ、お前つて俺の使い魔だな。」

そして、俺は木を登り、太い枝にすわり、幹に背中を預ける。フルノを腕に抱き、昼寝のモーションに入るとき・・・

「ヒック・・・う・・・うう・・・」

泣き声が聞こえてきた・・・

「はあ、誰だよ、こんなところで泣いてるの？」

と、言つて聞こえてきたほうを見ると、そこにいたのは少女だ。あの、制服を見るとあれは1年生である。栗色の髪をしている。

「あれを俺に慰めろと？」

『 そうじやないかにや？ ここで慰めが成功したらすかれるにや。』
僕も一応男であつて、女性に好かれるのは悪くない、といふか良い。

「別にやつこつのは興味ないんだがな……」のままだと、俺の匂寝に支障が出るな……よし、行つてくるか。」

そして、俺は木から飛び降り、彼女の方に歩み寄り

「あのあ？」

と、声をかけると彼女はビクツつと方を揺らした。

「は、はい。どなたでしょうか……」

彼女の声は震えていた。

「なんで、ないているのかと思つて。」

「あ、気にしないでください……あなたには関係ありませんし……」

・

「いやね、それがさ、僕匂寝したいんだよ……それで、君がそこで泣いてると寝れないわけ。男の性として、泣いてる女性なんてほつとけないんだよね？」

ほつといたことをマリアなんかが知つたら殺されかねないかも……

（（（（・。））））アワワワワ

「慰めなんて要りません……匂寝の邪魔なら私がどこかへ行きます……」

「いや、分かった。慰めるのはやめるよ。けど、何があつたかぐらいいは、教えてくれないかな？誰かに言つと、気が楽になるよ？」
実際気が楽になる。経験者が語る。

少しの沈黙が走り……

「私・・・ギーシュ様を愛していました・・・一緒に遠乗りに行つたときも・・・とでも、うれしかったんです・・・でも・・・でも・・・」

彼女はポツリ、ポツリと喋りだし、そして、また泣いた・・・

「あー、今さつきの決闘の原因か・・・」

「他の皆は・・・やめたほうが良いとか、浮氣されるのがオチとか言つてました・・・けど、私はギーシュ様を信じていました・・・そして、裏切られたんですね・・・」

「ああ、かわいそー・・・ギーシュってなんて奴なんだろ・・・殺してえー

「そつか・・・それは・・・なんていうか・・・氣の毒だね」

「うう・・・ヒック・・・」

また、泣き出したよ・・・どうしよう・・・くそ・・・これまで、人を慰めるなんてしたことねえんだよ・・・どうすりやいいんだあああ！？ここはあれしかない・・・『俺の胸ぐらになら貸したやる』作戦だ！

「ぎ、ギーシュじゃなくて嫌かもしれないけどや・・・ぼ、僕の胸くらになら貸してあげるよ？」

この言い方で合つてゐるのか・・・？つか、いきなりこんなこと言つていいのか！？

「う・・・う・・・」

そんな、ことを考へてる僕とは違い、彼女は僕に近づき、僕の胸に顔を埋め、泣いた・・・そんな彼女を俺は抱くことしかできなかつ

た・・・もつと、ちゃんと慰められればよかつたのに・・・

彼女が俺の胸で泣き始めてからどれくらいの時が経つただろうか・・・
・ 5分? 10分? はたまた、30分?
まあ、時間が経つた。

彼女はいまだに、俺の腕の中にいる。もう、泣いてないけど・・・
そして、なんだか、離れるにも離れなくなってしまった。そんなと
ころに救世主登場!

「おお、ルーラいたいた、つて、うをー!
才人が来たあああー!」

人の声に反応して彼女は俺から離れる。一人とも、赤面である。目
を合わせることもできない・・・恥ずかしい・・・

「あ、ああ、あの、すみませんでした・・・なんだか、迷惑かけて
しまって。染みまで作つてしまつて・・・」

俺の胸には、彼女のないた跡ができている。それくらい、彼女は泣
いたのだ。ギー シュ許すまじ・・・

「い、いや、いいよ。君みたいな女性を抱けるなんてめつたにない
からさ、役得だったよ。それに、気分も晴れただろう?」

「は、はい。ありがとうございました・・・気分も晴れましたし、
落ち着きました。ありがとうございました・・・えーと・・・
まだ、名乗つてなかつたか・・・

「僕の名前はルーラ。ルーラ・ルイ・ラーケ。ルーラって呼んで。」

「私の名前はケティです。ケティ・ド・ラ・ロッタです。ありがとうございました、ルーラ様。」

「どういたしまして、ケティ。もう、そろそろ行かなことだけないんじやない？」

と、言うと彼女は時間に気付いたのか、急いで

「ほ、本当にもうこわけありませんでした。こんな、時間まで・・・」

「

「いや、いいよ、言つただろう役得だったし。女の子はもう帰つたほつがいいかもよ。」

「は、はい。それでは、失礼します！」

と、慌てて急いでその場から逃げた。

「お、お前もやるんだな？」

「なんの、話だ才人？」

「いや、今の女の子、彼女だろ？」

「ち、違う！ 彼女は、君の決闘の原因の一役かけられてた女の子だ。そして、僕は慰めてただけだ・・・時間かかったけど。」

「へえ、あの子が・・・悪いことしたかな？」

「いや、もつと、あの状態が続いてたら、彼女はもつと傷ついただろ。そんなときじや、僕では慰めにもならないよ・・・」

「やつか？お前結構やつになつてたぞ？」

「褒め言葉として受け取つておくれ……で、用事は？」

「そつだつた、この刀なんだけど

」

「あげないよ？それは、大切な品だからね。曾祖父の遺品なんだ。

「や、そつなのか……それじや、仕方ないな……」

「で、君の世界の話だ！早く、聞かせてくれ！」

「ああ、そつだつたな……お前なんで、そんなにワクワクしてんだよ？」

「興味が沸いたんだ！」の品が来た場所だろ？気になる！」

「ああ、そつか……じゃー、どこから話そつか……」
そして、才人は自分の世界について、語り始めた……

「田ぐ、貴族はいない。

「田ぐ、鉄が空を飛ぶ。

「田ぐ、万人が使える技術がある。

「田ぐ、魔法が架空の話。

こんな、世界を話された……

「信じがたいな……けど、そんな世界があつたら面白いな……」

「信じないのか？」

「いや、信じるよ・・・才人の言つことだ。才人は嘘を付けなさそうだからね。」

「あ、ありがとうーお前だけだよ、俺のこと信じてくれるのー!」

「俺と普通に接してくれるのもお前だけだよ。」

そういうて、自嘲氣味に笑う。

「なんでだらうな? 魔法つてそんなに大切なのか? 人間つて外じやなくて中身だろ?」

「そんな、ことも気付かないくらい、こっちの人間は腐っているんだよ・・・芯からね」

「なんだか、お前つてこっちの世界の人じゃないみたいだな・・・こっちの人の考え方じゃない。」

「いや、それは、お前がまだ貴族しか知らないからだ・・・平民はみんな俺みたいだよ。ただ、貴族を恐れるけどな・・・」

「そなのが・・・平民か・・・仲良くなりたいな・・・」

「それなら、こここの使用人と仲良くなつたらどうだ? 言つちゃ何だが、こここの使用人は美人ぞろいだぞ?」

「本当か! おし、今後の目標は決まった・・・」

そう言つて、僕と才人は空を見上げる。今はもう、夕方で空が赤くなつてゐる。

それから、暗くなるまで俺と才人は話さなかつた。

「なあ、才人・・・」

「なんだ?」

「もしさ、お前がもとに世界に戻れるんならさ・・・」
「こんなこと、願つていいよな・・・こんな世界俺は未練もない・・・」

「俺も、一緒に連れてつてくれないか?・・・」

「この一言が、暗い空に残つた。」

才人は、答えてくれなかつた・・・
そして、それから、話さないまま俺たちは別れて、部屋に戻ること
にした・・・

第4話～決闘、才人の世界～（後書き）

女の子とか、書くのとも、苦手です・・・そして。泣き声なんて
もつてのほか・・・下手で、すみません・・・オリジナル魔法です
が、自己強化はどうやっても、細胞とかの話が入ってしまうので、
この時代にあわないでの、強化系はできないと思います。意見があ
つたら、感想ください。

第5話～バカは本当にいた・・・（前書き）

いやあ、なんだか、色々キャラ変わっています。ルイズとか悪者ですwwでも、後で、仲を良くしたいとも思つてます・・・ギーシュも・・・とか、いうか、ギーシュはできたとしても、ルイズは難しいです。元々嫌いなんで・・・

第5話～バカは本当にいた・・・

「世には、なんていい言葉があるんだ？」
『一度あることは、一度ある、一度あることは、一度ある、一度ある』
とは何度も起る』
まったく、その通りだよ・・・

第5話～バカは本当にいた・・・

昨日、才人と話した後、部屋に戻るとマリアに制服の汚れ（染み）
のことを聞かれた。
恥ずかしがったが、マリアには正直に話した。
つて、マリア！子を見る母親のよつねはやめて！？

そんなこんな（どんな！？）で次の日がやつてきて、俺はルイズに
文句を言われている・・・

「うううと、あんた！昨日の話の続きよー。」

「ああ、うるさいな。なあ、フルノ？』

「いや～

「ちよつとーちゃんと聞きたかったよー。」

「ああ、何？朝からひるせいんだけど？」

「昨日はよくも私のことを貴族＆メイジ失格って言つてくれたわね！私が誰だか知つて言つてるの？私はヴァリエール家の三女よ！？」

「ああ、ああ。やうやつて、自分の地位に甘んじる・・・まったく、だから貴族つてのは・・・ハア・・・」

「あんたも貴族じゃないのよ！？」

「少なくとも、俺は自分で喜んで平民を虜げたことはないぞ？それに、俺は貴族なんて腐ればいいと思つよ・・・」

「はあ？あんた、何言つてるの？あんたのところのメイドだつているじゃないの？ちゃんと虜げてるじゃない？それに、平民の存在理由 자체が貴族に従うことなのよ？あんた、馬鹿なんじゃないの！？」

「そつ思つてゐるつちは、君はメイジどころか、人間としても考え直したほうがいいかもしないね？それに、俺はマリアを虜げてなんてない。むしろ愛してる。」

「ああああ、あんた！？よくも、そんな事言つてくれるわね！？人間やめたほうがいいのはあんたじゃない！人の事そこまで悪く言ってくれて！」

「はあ、お前のところの才人は大変そつだな・・・同情するよ・・・

「

「あの、犬は私のなんだから、どうしようとも、私の勝手でしょう！あんたが、口挟まないで！」

「犬？お前は人間のことを犬呼ばわりしてるとか？」

「そうよ！して悪い！？あんなの犬で十分よ！」

はあ、コイツとは話してて不愉快極まりない・・・死ねって感じだ。
・

「そ、そ、うよ！あんた、勝手に人の犬に施してるんじゃないわよ！？この前は勝手に匿つたんじよ！？」

「殺されかけている『人』を助けないほど、冷徹じやないんでね。」

「『人』？今『人』つて言つた？ハツ！何言つてるのよ！？あれば『犬』よ！私の『犬』なんだから！」

「お前とは、話すことがないみたいだな。じゃあな。」
と言つて、彼女の返事を待つ前にその場を去つた。

時は流れ、今は放課後。

僕は、今木陰で本を読んでいる。題名は『この世と貴族』。
これは、ほんどの貴族の家庭にも置いてある教本だ。
内容は、ルイズが言つていたことを少し穏やかにしたものだ。
曰く、貴族は偉い。
曰く、平民とは貴族の僕。
曰く、貴族こそがすべて。
読んでいて、虫唾が走る。この世のすべてが、否定したくなる。気

持ち悪い・・・

「ああ、こんな本読むんじゃなかつた・・・」

『じゃー、なんで読んだにや?』

「次のテスト範囲だ・・・まつたぐ、この学校は魔法だけ教えればいいのに・・・貴族とは何か、なんてくだらない・・・」
と、ため息交じりで俺は呟く

そんな、僕に突然

「あ、あの。誰と話をしてるんですか?」

と、声がかけられる。僕は本を、パタン、と閉め、声の方向を向く
とそこには

「ケティじゃないか。」

「お久しぶりです、ルーラ様。」

なんで、様なんだらう?

「久しぶりじゃないだらう? 昨日会つたばかりだよ?」
と、言つと、彼女は俯いて顔を耳まで赤くなつてゐる。

「ま、まあ。昨日のことは忘れよう、な?」
と、俺も結構、いや、かなり恥ずかしいので。

「わ、忘れたりなんかしません!」

「え?」

心底、びっくりしました。はい。

「わ、私。と、とても、嬉しかったんです。ルーラ様が私のことを優しく、だだ、抱いてくれて……」

そこまで、ストレートに言わると、まじで恥ずかしいんですけど・

「そ、そつか……それは、なんだか、こっちからしても嬉しい限りだね。」

「うう……」

黙ってしまった……どうしよう……女性と会話なんて、ルイズの口論壁（一步的にさせられる）とマリアとぐらりしかないよお・

・

「け、ケティ。こっち来なよ。涼しいよ？」

別に、影じやないところが暑いわけじゃない。ただ、話が続かないだけだ。

そして、彼女は返事をせずに、木陰のほうに来て、僕の隣に座る。彼女はいい匂いだった。マリア以外の女性と関わるのは、初めてといつても過言ではないし、マリアはメイドであって、貴族のようないい裕福な生活はしていない。

と、いうことは、僕は初めて貴族の女性と接触しているのだ。我ながら、情けない……

「にゃ

と、フェルノが「よつー」と、挨拶するよつて鳴いた。

「わあ、猫さんですか？かわいいですね。」

女性とは、かわいいものに弱いと聞くが……本当だったとはね……

「やうかい？ 気に入ってくれてよかったです。フルノって言つて、僕の使い魔だよ。」

「いいですね、こんな使い魔私も欲しいです。」

「本当かい？ もうひと、神々しい使い魔が欲しくないか？ ウチのクラスの一人なんてドリゴン召喚したよ？」

「そ、そんなものより、もつと穏やかな猫のほうがいいですっ！ ドリゴンなんて・・・食べられちゃうかも・・・」

「ははは、さすがにそれは・・・ないと思つ・・・たぶん・・・あつと

「ははは。それじゃー、口ッを一個教えてあげるよ。」

「口ッですか？ 召喚にコッなんて？」

「あるに決まつてゐじゃないか。自分の欲しいものを強く思えば、手に入るよ。」

「はい、真っ赤な驢です・・・まあ、ちょっと成功しそうじやん？」

「やう・・・なんですか？」

「やう、思つとけ。」

「はいー。」

それから、少し世間話（友達、料理、趣味などなど）の話をして、また明日も同じで余おつといふ約束までしてしまった・・・少し緊張してました。はい。だってねえー、もともと友達なんてい

ないし・・・女性なんてもつてのほか・・・

まあ、そんな感じで今日と、言つゝ日が終つた。

4日後

今日もケティと会つ約束をしている。今日は、魔法を説いてあげる約束をしている。

別に、僕は魔法が使えないだけで、イメージはできている。というより、普通の人よりイメージできる。

それは、使えないものだからこそ、イメージしかできない故に。

そして、今日も木陰にて彼女を待つ。
この4日間、僕は変わった。彼女に接して。

人というものが分かつてきた。いまだに、怖いけど。
それでも、彼女は怖くなかった。一応、僕が慰めてあげたし、最後まで見届ける（？）責任を感じている。

でも、だから一緒にいるんじゃない。たぶん、一緒にいたいから一緒にいるんだと思った。

まだ、自分の気持ちは分からぬ・・・難しいです・・・

「ルーラ様、もう、なんでいつも私より先にいるんですか？」

「ん？ 5分前行動つてやつだよ？ 約束しといて人を待たせるのはいけないからね。」

「明日は、普通に来てください。私がルーラ様のことを待ちます。」「えー。なにそれー？ 最近の流行？？」

「わ、分かったよ。明日はそいつする。」

「約束ですよ？」

「ああ、約束だ。」

それから、魔法のことを話した。僕の知つてゐる限りの知識を彼女に伝えた。

魔力子のこと これがあると、イメージは大分しやすいはずなのだ。

この「じる、気付いたのだが・・・これは、たぶん・・・氣のせいだといいんだが・・・ ちょうど、廊下の突き当たりのところに人がいる・・・たぶん・・・ケティの友達だ・・・ キヤツキヤ言つてるのが聞こえるんだよね・・・恥ずかしいいい！」

「で、魔法の話はこれで、終わりだけど？ 分かった？」

「はい！なんだか、今ならできる気がします！なんだかとつてもありがたいです。」

「はは、いいよ。どうせ、こんな知識持つても意味がないんだ。使えないんだし・・・」

僕が自嘲気味に笑うと、彼女が俯いて、ゴー！ゴー！呟いている。

「・・・・・・る、ルーラ様は魔法が使えないでも・・・あの・・・ そのお・・・・」

何が言いたいんだろう？

「……私は魔法にかけられたよう……元気にしてくれました！だから、そんなに、気になくても……私今でも感謝します！」

「そんなこと、言われたのは初めてだ……けど、僕が魔法をかけたんじゃないよ……僕が魔法をかけられてるんだ……」最後のほうは小さい声で言つた。こんな、気分初めてだ……こんなに、異性と話したのは初めて……

「……感謝するのは僕なのに……」

「なんていつてるんですか？全然聞こえませんよおー？」

「な、なんでもないよ！気にしないで！……こんなのに、聞かれたら、俺恥ずかしくて死ぬ！」

「なんでも、ないわけないじゃないですか！早く教えてくださいー……」と、言って彼女は追求してくる。なんて、いい雰囲気なんだかう……・和む……

しかし！そんなところに悪の大魔王登場！

ギーシュが来てしまつた……

「うわっ……やつべ……」

まじで、やべえー！こんなところ見られたら怒るぞあいつ……

「へへ、どいたんですか？って……ギーシュ様……」

そして、ギーシュは「ひに近づいてくる。

「ああ、僕の愛しのケティー！あのときこ本当にすまなかつた！けど、僕は決めたんだ！君こそが一番美しい！僕の女神だとね！」
はつきし、言つてきもい・・・をええ――

「私も気付きました・・・」

「ほ、本当かね！じゃー、僕の所に――――

「ギーシュ様は最低です！」

「「？」「

俺まで、声でちやつたじゃん！

「私ももう見ました！ギーシュ様が夜な夜なミス・モンモランシの部屋に行つているの！友達も見ました！それなのに、また浮氣するんですか！本当に最低です！」

「な、なにを言つてるんだい？僕が夜這いなんてするわけないだろ
う！僕の愛しの蝶よ！なぜ、僕をそのまで嫌う！」「

誰も夜這いとか言つてないぞ！？墓穴掘つたな・・・

「もう、話しかけないでください！」

「君は落ち着いてないだけだ。僕と一緒に落ち着こう、この美しい夕焼けを見て。あつちで話そうじゃないか？」

と、言つてギーシュはケティの手首を掴んで連れて行こうとする。
本当にコイツは腐つてゐるんだな・・・

「いやですーやめてくださいー！」

「来るんだ！」

だんだん、乱暴になつてくる。僕の心の中でなにかがふつふつと沸いてきた・・・

突き当たりにいた、ケティの友達と思わしき人達も動き出した。

「つづー！やめてくださいー！痛いですー！」

もう、これ以上は耐えられない！

「止めろーー！」

僕は、ギーシュの手を叩き、ケティの肩を抱きこすりに寄せる。

「ルーラ様・・・ありがとうございます・・・」

少し涙目で彼女が見上げている。こんなときに不謹慎だが・・・かわいい！気にしないでください・・・

「ルーラー！邪魔をするなー僕は彼女に用があるんだー！」

「痛がつているだろー！なんで、分かってあげないー！」

「なにをだい？彼女が僕のことをどれほど想つてるかかい？それなら、分かっているやー！」

「違うー！なぜ分からない！彼女がどれくらい傷ついたのか、お前は分かってるのかー？」

「傷ついた、彼女を慰めるのが僕の役目ぞ。」
と、ギーシュは自分の髪をいじりながら「ふつ」と言つて、決めたつもりらしい・・・

「そんなものいりません！慰めならルーラ様からもういました！そして、ギーシュ様のはいりません！」

と、「あっち行け」オーラ全開のケティが言つ。彼女もこんなに大声出すのか・・・

『なんだ、なんだ？』

『「ひるむせこ」なあ？何事だよ？』

『おい、あれ見ろよ！ギーシュがこの前二股かけて振られたほうじやん』

『つか、あれルーラか？なんで、ケティちゃんなんかといるんだ？』
ちつ！外野が来たか・・・早く、ひとを終らせないと・・・
「わかつたか、ギーシュ！だから、さつやとどつかへ行つてくれ！」
そうしないと、この流れだとお前と決闘しないといけないじゃないか！そして、お前また負けるんだよ！

「！」こんな屈辱受けたのは、初めてだよ！しかも、平民じときこ！これで、2回目だ！非常に不愉快だ！』

おい！ちょっと待て、俺は平民じやない！

「ギーシュ様！ルーラ様は平民じやありません！ギーシュ様なんかより立派な貴族です！」

おい、ケティ！それ言つてくれるのは嬉しいけど、相手に油を注ぐのは止めてくれ！

「ここまで、彼女を穢すとは！君は彼女に何をしたんだ！」

「何もしないよ！だから、早くどっか、行つてよ…」

「こそ！この『』ろ人とは（ケティ、才人除く）口喧嘩しかしてないよ！

「僕の名誉を汚すのがそこまで、楽しいのかい！才人には負けたよ！ああ、彼は強かった！彼のことは認める！しかし！君の事は断じて認めない！男としても！メイジとしても！貴族としても！君の事は絶対に認めない！」

「お前に認められなくていいから！」

つか、才人おめでとう。貴族の友達ゲットじゃん。

「諸君！決闘だ！僕がこの『单一のルーラ』に我が手で制裁を下してやうう！」

そこまで、重大なこと…

そうして、決闘で治まり、野次は去つていった。

俺とケティと、どこからか来た才人がその場に残つて。

「す、すみません…ついカツとなつてしまい…本当に申し訳ありません…」

「いいよ…勝てば問題がないんだ…」

「お、お前勝てるのかよ？魔法使えないんだろ？心配してくれるのか才人…お前つて奴は…優しいな…」

「使えるよ…一つだけ…」

「一つつて……お前相手は何種類も使うんだぞ？勝てるのかよ？」

「勝つてみせるさ……勝たなきやいけないんだ……」

「なんで、そこまで？」

「勝たないと、ケティがもつと悲しむだらう？」「

と、言うと沈黙が走る。そして、空気を読まずに……

「犬！」にいたの！って、ルーラじゃないの！何してるのよ！』

「お前は、俺が何もしてなくとも突っかかるのか……今は疲れるんだ……話しかけるな……」

「わ、私に向かつてそんな事言つていいのかしら？ど、どうなるか知らないわよ？そつちの娘も？あんたのメイドも？分かった！？」

SIDE才人

「わ、私に向かつてそんな事言つていいのかしら？ど、どうなるか知らないわよ？そつちの娘も？」

「ゴイツ！事情も知らないで！」

けど、こんな思想巡らせている間に、ルーラがいるべき場所にルーラがいないで、ルイズがいるべき場所にルイズはいなくなっていた。探すと、ルイズが壁に押し付けられ、ルーラがルイズを壁に押し付けている。って、ルイズ足床についてないぞ！

ルーラの杖はルイズの喉元に……赤い刃を輝かせながら……

「二人に何かしてみる。お前の命はないと思え。」

そして、まるで虫けらでも見るような田をばすし、栗色の髪の子の方に歩み寄る

「ああ、ケティ。行こうか？ 送つていいくよ。」

「は、はい・・・では、さようなら、才人さん、ミス・ヴァリエー
ル・・・」

と、言って二人ともその場から消えていった。

残ったルイズは氣絶している・・・

俺の田じや、追えなかつた・・・捕らえることもできなかつた・・・
ルーラお前は何をしたんだ？

ルイズビリジョウ・・・運ぶか・・・怒られそりだし・・・
後で、ルーラのこと訂正しておこう・・・あいつそんな悪い奴じや
ないし・・・いい奴だ・・・

SIDE OUT

そして、夜は開け、次の日が来る。

だれも、予想もしていない結果を残すために。

ケティとルーラの約束はなくなつたそうで・・・（分からぬ方は
上のほうを見ればいい）

第6話～魔法はイメージなのですよ～（前書き）

いやあー、なんだか書いて面白いと同時にS.Sを書く大変さが分かります・・・今回は主人公のオリジナル魔法です。しょぼいです・・

第6話～魔法はイメージなのですよ～

「僕の名前は『青銅のギーシュ』！グラモン家の四男！そして、お前に敗北をもたらす者だ！」

「我が名は『单一のルーラ』ラーケ家の長男。お前を夢から覚ます者。」

ただいま、生中継で『ヴァーストリの広場』でござります。
さあ、これから始まる試合は、ルーラ vs ギーシュ！
さあ、どっちが勝つてもおかしくない！これは、おもしろい試合になります！

第6話～魔法はイメージなのですよ～

SIDE才人

始まってしまった・・・俺は何もできなかつた・・・止めるにとも、
励ますことも・・・
俺は無力だつた。力があつても、それは戦う力。
俺は、何をすればよかつたんだろう・・・

「なあ、ルイズ。止めなくていいのか？」
横に座つて見物している主人様に聞いてみる。

「ふん！あんな肩負ければここのはー。」

「「」の前は必死に俺のことをとめたの。。。。」

「あああ、あればアンタだからよー！あんな平民以下の生物どうなつてもいいわー！」

「ルーラは平民じゃなくして、貴族だろ？」

「あんなのを貴族って言わないのー！魔法を使えない時点で貴族は名乗れないわ！」

「使えるてるじやん・・・ブレイド・・・それに、それ言つたらお前だつて魔法使えてないし・・・」

「わ、私のは爆発してるじゃない！誰にも真似できないわー！ブレイドでコモン・スペルの一種なのよ！魔法って言わないわー！」

俺からしたら、あれも十分に魔法なんだけどな・・・

「ほひ、始まるわよーせつと、あの悪々しいルーラが裁かれるわー。」

「軽くすむといいんだけどな・・・がんばれよルーラ・・・」

俺にはここから、彼の無事を祈る」としかできなかつた・・・

れを使うか・・・

「・・・・・・・・・・・・・・

「どうしたんだねルーラ君っまさか、いまさら怖気づいて言葉すら発せないのかい？まあ、今ならここで僕に謝れば許してあげなくもないけどね？」

「ん？ああ、考え方をしていたんだ。すまないね。」

「こつまで、そのふざけた口を動かすことができるんだううね！？」

「こつまでも、だな。君の攻撃は僕に当たりあえないからね。」

「そこまで、僕を侮辱するか・・・では、後悔するがいい！そして、光栄に思え、僕が自分の手をわざりつてあげたことを…」
そして、決闘は始また・・・

「出でよー！ワルキューーーー！」

ギーシュが杖を振り、地面から戦乙女『ワルキューー』が生える。
魔法名『鍊金』。金属を作ることができる。

ギーシュのワルキューーは一つ名通り青銅でできている。

「なんだか、そんなこと言わると、こいつもかっこつくななるな・・・」

俺なんて、精精『ブレード』しかいえない・・・ぬうー、こいつは・・・
・決めた！

「我が戒めをその身に表せ！ブレードー！」

そして、杖の周りに赤みがかった、半透明の刃が現れる。なんだか、

意味不明だな・・・まあ、いいか・・・

「ふん！ そんなちんけな刃、僕のワルキューレが碎いてあげよう！」
そして、ギーシュは一人のワルキューレを僕に突っ込ませる。

ギーシュは油断していた・・・相手が僕で。僕が『単一』で。ぼくが魔法を使えないと思っていた。

しかし、僕はこの魔法しか使えないからこそ、この魔法を極めた。

僕の刃はいとも簡単にワルキューレを真っ二つにした。バターをナイフで切るよつて。それはもうスッパリと・・・

「なつ！ そんな、嘘だ！ 僕のワルキューレがお前如きに！ なにをした！」

そういうて、ギーシュはまた6体のワルキューレを鍊金して、僕に突っ込ませる。

さすがに、僕でも6体同時はできない。刃が一本の場合は・・・

「これで、君も終わりだ！ ブレイドしか使えない君に6体同時攻撃になすすべはない！ 才人じやあるまいし！」

魔法とはイメージ。イメージができればなんでも、とは言わないが、ある程度のことはできる。

ブレイドの場合、イメージによつて変えられるのは、切れ味（回転数）、質量（大きさ）それと形だ。

この中で一番大切なのが『形』になる。形によつて、回転数の限界ができる。

形を変えると、そのぶん質量も変わる。

例えば、形を『壁』にすると、質量は大幅に増える（少なくともいいが、壁の役割はもてない）、そして回転数は皆無になる。形を『剣』にすると（通常時）質量、回転数ともにバランスが取れる。

そして、形を『カタナ』にすると、質量が少なくなり、横からの衝撃に弱くなり脆い、反面、回転数はMAXに近くなる。

これらは、単体相手の場合や、防御の場合だ。

しかし、複数相手の場合は？

今のルーラでは、質量と形を上げ、それに回転数を加えることは困難とされ、切れ味が格段に衰えてしまいます。

しかし、ブレイドとか元々鉄をも切れる刃だ、青銅などバターに等しい。

だから、ルーラは今回複数相手の戦法を使った。

想像するのは、蜘蛛の巣。すべての敵を落としいれ、喰らう。

蜘蛛が象徴する、嫉妬の思いを乗せ。彼は放つ。

「歪な論舞」

そして、ギーシュの放った、ワルキュー＝6体はぱらぱらになり、踊り狂つたかのように崩れ落ちた。

操り人形の糸が切れたように・・・

沈黙が世界を支配する。

誰も、何も発しない。当のギーシュもあつけを取られている。

全員が何が起こったかわかつていない。
ルーラにとつて、普通のことが、彼等には理解できない。

SIDEタバサ

見えなかつた。彼が何をしたのか。
いや、彼は何もしなかつたのかもしれない。
あの場所からただ、不可視の斬撃を放つた?
しかし、彼は魔法が使えないはず・・・

「ね、ねえ、タバサ? 彼がなにしたか分かる?」

「・・・(フルフル)」

はつきし言つてこの場の誰も分かつてないだろう・・・

「私も、彼があつたり負けるとは思つてなかつたけど・・・あつさ
り勝つとも思つてなかつたわ・・・弱い同士粘るかと・・・」

私もそう思つていた。けど、結果として彼が魔法一つで打ち負かし
た。

興味が沸いてきた・・・

「なに、タバサ? 彼のことじつと見ちゃつて。気になるの?」

「気になる。」

「あんたがそこまではつきり言つなんて本当みたいね・・・」

「俺の勝ちだ、ギーシュ・ド・グラモン。ケティからは手を引いてもらうよ。」

沈黙を破ったのは彼だった。彼等は女のことで揉めていたのか・・・結果としては、決闘が見れた。ワルキューの彼には感謝しなければ・・・

「み、認めないぞ！僕は負けてなんかない！どうせお前が何かしたんだろ！金で人を雇ったな！」

みつともない・・・自分の負けを認めれない人は屑だ。

「ギーシュみつともないわねえー。ちょっとはいい男と思つてたけど・・・」

「みつともないぞギーシュ・ド・グラモン。自分の負けを認めろー。」

「ひ、卑怯だ！貴族の風上にも置けない！」

まったく、彼は芯から腐っているらしい・・・

数人が、ギーシュの周りに行き、彼を静め始める。

「ふん。自分の負けを認めないなんて。お前こそ貴族の風上に置けない。」

そう言つて、彼はその場を立ち去ってしまった・・・

彼とは、後で話をしてみたい。

SIDE才人

ルーラは勝った。誰もが、予想しない形で。結果はルーラの圧勝だった。俺のときみみたいにギーシュを打ち負かしてしまった。

隣にいるライズは俺が勝ったときみたいに、口が閉まらないくらい驚いている。

それはそうだ、今までバカにしていた相手がいつも簡単に勝つてしまったのだ。

「ライズ、ルーラのところ行つて来るわ。」

「ちょっと、犬！待ちなさいよー私も行くわよー。」
と、言つて怒鳴つてくれる。

コイツの行動パターンは、怒鳴る、殴る、蹴るくらいしかないらしい。

けど、時々笑つてくれる。その笑顔が欲しくて、俺はがんばつているのかもしれない。

SIDE OUT

勝つた。それはもう、圧勝だった。

これで、やつとケティの所にいく。

見回してみると、彼女はどこにもいない。

彼女の友達と思わしき女性たちも探しているらしい。

「あ、あの？ケティどこにいるか知りませんか？」
俺に尋ねてきた。

「ごめん、僕も知らないんだ・・・」
嘘です。実は知っています。今の時間はいつも会うことになっている約束の時間だ。

「そ、そうですね・・・では、失礼します。」
彼女等が去った後僕は一人で歩き出す。

いつも彼女と会っていた木陰のところへ。

「やあ、ケティ。今日は待つてくれたんだね？」
彼女の隣に座った。

「る、ルーラ様！け、決闘はどうしたんですか！？」

「もう、終ったよ？時間が掛かっただけだった。」

「か、勝ったんですか！？」

「そんなに意外なの！？そこまで、弱くないんだけどな・・・」

「だ、だつてルーラ様の一つ名は・・・」

「单一だよ。けど、单一も意味が違う。ただ一つしか使えないけど、
ただ一つだけだからこそ、僕は強くなれたんだと思う。僕ってバラ
ンス取れないからさ・・・」

そういうつて、彼女を撫でてあげる。すると、彼女は目を細めて僕の肩に頭を預けて、目を閉じ動きを止めた・・・

その時間が、何時間のようにも感じた。いつまでも続いて欲しいと願ってしまった。叶いもしない願いを願ってしまった。

そして、何時しか彼女は眠りについていた。

SIDEケティの友達の一人

私たちがケティを探していると、自然と一つの場所に向かつていた。それは、ケティがルーラ様と会っていた木陰の場所だ。

ここにいたるまで、時間を食ってしまった。

もう、それはそれは色々な場所を探しました。教室、部屋、研究室、トイレ、タンスの中・・・。けど、どこにもいませんでした。

そして、いざ木陰の場所に来てみると、ケティはどこにも見当たりません。

けど、木陰に一人の影が見えました。

近づいてみると、それはルーラ様でした。

「ルーラ様、こんなところで何をしているんですか？」

彼は、私たちに静かにするように言いました。けど、なぜでしょう？

「しーっ」

「ケティはどこですか？」

と小声で聞くと、ルーラ様は自分の横を指差した。そこには

「つて、ケティ！」

なんとケティがいたのです。

「しーつ！」

「ん・・・」

危ないところだつた・・・

「やりますね、ルーラ様。ここまで、ケティを手なずけるなんて・・・

「僕何もやつてないんだけど・・・彼女が勝手に寝ちゃつたんだよ・・・

・・・

「それは、もつとすごいことです。」

二人を見ているとそれはまるで兄妹をみているようだつた。

ルーラ様が優しいお兄様で、ケティがブラコンの妹。

絵になりますね・・・

SIDEOUT

SIDE才人

俺たちが（ルイズは勝手についてくる）ルーラを探し始めて少し時間が経つた。

結局あいつは僕に「行つたんだろ?」。

「ねえ、あいつどう行つたのよ?」

「お、俺が知るかよー。」

「じゃー、どう歩こてるのよー。」

ああ、マイシツのセラー。なんでも、俺こんなやつ好きになつたんだよー。」

あ……あれ? こいつはかもな……と思いついたのがあいつと栗色の髪の少女がよく会つていた場所だった。

つて、そろそろあの子の名前も覚えたほうがいいかな……? 」

「おー、レーチだー。」

「ちよつと、お主人様に命令なんてしていいと思つてゐるのー。マイシツはどっちなんだ! 案内して欲しいのかよー。」

そして、あの木陰のところに来ると、もうすでに数人の女生徒が集まつていた。

俺も近くにより

「よつ、ルーラー! 元氣か!」

と、少しほんわかしてやろうと懸つたのこ……

「「ルーラー」」

と、怒られました……

猫なんて引っ搔いて来るし……

痛いよ猫さん・・・

つて、あの女の子がルーラの肩で寝てる！なんて、羨ましい！

それから、静かにしながらルイズが彼に尋ねはじめた。

「あんた、最後の魔法何よ？ 何あれ？ まず、魔法？」

「あれば、『ブレイド』だよ」「
まじで、あれブレイドなの！？」

「や、そんなはずないでしょ！ ブレイドがあんなことできないわよ
！」

「」「」「」「」「」「」

やばいだろ、こんなに気持ちよさそうに寝ているケティ（今さつき
知った）を起こすなんて・・・
やべえー、今「ん・・・」とか、行って寝返りを打ちかけたぞ！？

「」「」「めん・・・」「

今回は、ルイズが謝った・・・

「あれは、『ブレイド』の刃の形を変えて、網みたいな形にして、
刃を糸状にした物だ。糸が細いから見えないけど。その分、切れ味
が落ちるけど青銅くらいなら大丈夫だったよ。」

「そ、そんなことできるなんて聞いたことないわよ。」

「それも当然だろ・・・誰も教えてない・・・」

「な、なんでアンタがそんなこと知ってるのよ？」

「ブレイドしか使えないからこそ、試行錯誤したんだ。」
「コイツの苦労がわかつた気がする。大変なんだろう。俺みたいに、
勝手に力がついたんじゃなくて・・・
そんな時、突然・・・

ガサツ

後ろのほうで何かが動いた・・・

SIDE OUT

後ろのほうで何かが動いた。それは確かなんだが、それに気が付いて
いるのが俺と才人だけとは・・・
ルイズお前は馬鹿なのか・・・

俺は激しく動くわけにもいけないし・・・
頼んだ才人・・・と目で言つてみると
才人に通じたらしく。

「そこにいるのは誰だ？」

と、後ろに向かつて言葉を放つてくれる。

「私」

そう言つて、出てきたのは

「タバサじゃないか?」

タバサだった・・・なぜ、彼女がこんなところに? 女子寮は反対側だし、図書館はもつと南のはずだ・・・

「なんで、こんなところ?」

「あなたの話を聞きに来た」

「ああ、お前もルイズみたいな口か・・・ああ、夜でいいか?」

「いい

「じゃー、夜に女子寮の裏で。」

「わかった

そういうて、彼女は帰つていつた。

「いいのかよ、ケティがいながら?」

「別に、僕とケティはそういうた関係じゃ・・・そつであつたとしても、彼女は僕の話を聞きないだけだろう?」

「そ、そつだな・・・(口)イツ鈍感なのか?」

「そ、そつですね(いえ、きつと分かつてます)」

「な、りいいか・・・」

「才人何がいいんだ?」

「なんでもねえよ」

「そりか?なら、いいけど……」

「ケティ、どうするか……」

「……あ……」

「どうするか?」

つて、おい才人その『ここはもつ決まつてるだる』みたいな顔やめろ!

「後は、頼んだわ。アンタが寝かしたんだから、あんたが責任取りなさいよ。」
と、言ってルイズが立ち去る。

「ルイズちょっと、待てよ」

と、言って主人について行く才人。

「では、これで」

と、蜘蛛の子を散らすように皆が去っていく……

俺を一人置いていくな!

SIDEケティ

今日は激しく後悔していました。

ギーシュ様とお付き合いしたこと、ギーシュ様に挑発的になってしまったこと。

そして、嬉しかった。ルーラ様が私を庇ってくれて。けど、そのために決闘してしまっている。

そして、今も後悔している。そんな決闘のせいでも(おかげで)今とても恥ずかしいです。

今さっきまで、私はルーラ様の肩で寝ていました。そして、なんだか何時起きていいのか分からなくなり、日は覚めているのですが・・・

まだ彼の肩によっかかるつてます。

けど、恥ずかしいのに・・・離れたくありません。彼の温もりが、とても優しく。私をあの時みたいに慰めてくれる。

今まであつた悲しいこと全部を慰めてくれる・・・ずっと、彼と一緒にありたい・・・でも、それは無理なお願いだと思う。彼はどこかここにいて、どこかここにいない・・・

本当の自分を見せてくれない・・・そんな感覚を誘つのです・・・

そろそろ起きましょか・・・でも、ここで起きたらこの温もりを一生味わえない気がするんです。

そんな時に彼が、

「ケティ……僕はわ、どこかギーシュを憧れてたのかもしれない……」

彼が話した。私が聞いてないと思つてゐるのだと思ひます。

「あいつは、魔法が使えて、自分に自信があつて……自分こそがすべてと思えて。本当にどうしようもない奴だつたけど。いつも、和の中心にいてさ……俺とは真逆にいた……」

たしかに、ギーシュ様は自分に自信があつたのでしよう。でなきや、あんなセリフいえません。

「一生掛かっても、僕には届かない憧れだつた……」

「けどね……」

「君に会つて、気付いたよ。」

「僕は僕で、彼は彼。元々、届くはずがないんだ……」

「だから、僕は、僕として生きよつて思えたんだ。」

「なにが、どう変わつたかなんて自分でも分からない……もしかしたら、変わつてなんてないかもしれない……でも、そう決めた。」

「なんだか、聞いてて照れくさいです。」

「そんな、ことを教えてくれた君が……僕は本当にまさか、このパターンは！？」

「好きだよ……」

彼の言葉が、そつと囁かれ……すぐに風に乗つて消えてしまった。

これを聞けて、本当に眠つていて良かつたと思つ……
眠つてなかつたらルーラ様から告白なんて絶対無かつた。

「つて、何言つてるんだろうね僕は……ケティは寝てて、聞いて
るはずないのに……本当は聞いて欲しかつたけど……僕には
まだそんな勇氣がないよ……」
「え、もう言つています……私起きてます！」

「よし、じゃー、そろそろ帰るか……」
「え、私はどうするんですか？」

と思つていると突然の浮遊感を感じた。

彼が私をお姫様抱っこしたのです。

それでも、寝たふりです。こんな、といひで起きれません……

「よかつた、起きなかつたか……」
「ですから、起きてます！」

そして、彼は私を一年女子寮へと連れて行きました。

そして、廊下を歩いていると、友達の一人に会い、私の部屋へ連れ
て行き、ベッドに寝かせ、また、私を撫でて退出しました。

そして、退出したあとすぐに、友達数人が押し寄せてきて

「なにがあつたの！」

「ルーラ様があんなに神妙な顔つきしてたわよ！」

「ま、まさか一線を越えた！」

「そ、そんな事ないです！なにもしてませんー。」

「と、いうか・・・ケティ、あなた、ずっと起きてたでしょ・・・」

ギクッ

「本当ー。」

「ちょっと、あんた羨ましいわね！」

「お姫様抱っこまで・・・」

と言ひ風に、彼女たちの妄想が膨れていきました。

SHDEOUT

俺は夕飯を食べ終わった後、タバサと約束した通り女子寮（この場合2年）の裏に行き、彼女を待とつと思つたら・・・

彼女はすでにいました。

「待つた？」

「待つてない」

「そつか、よかつた・・・」

「説明」

僕は彼女が苦手だ・・・会話が続かない・・・それに、どこかよそ

よそしい・・・

「分かったよ・・・タバサは魔法はなんだと思つてる?」

「魔法は武器」

初めてこんな答えを聞いたよ・・・

「ああ・・・そういうのじゃなくて・・・なにが大切だと思つ?」

「想いの強さ・・・信念」

「まあ、あながち間違つてないね・・・魔法で大切なのはイメージだ」

「イメージ?」

「そう、魔法は不確かなものだからね。イメージ次第でいくらでも変わつていく。」

「本当?」

「本当だよ。僕が今日使つたのを聞きたいんだが、」

「そう」

「あれは、ただの『ブレイド』を強化したものだ。コモン・スペルだよ」

「本当?」

「本当だ。あれは、対複数用に作った技で、切れ味はあまりないけど、量を多くすれば結構広範囲をカバーできる……はず」

「そう」

わかつてくれたのかな？

「なら、ワインディング・アイシクルを強化するのなら？」

「あの魔法か……あれなら……風・水の魔法だし……氷の矢の周りに風の層を一枚作っておいて、衝撃への耐性と貫通力の強化かな」

「どうやるの？」

「そう、イメージするだけだよ。今日使ったのは、蜘蛛の巣をイメージするし。その、イメージは個人個人で変わるから教えられないけど……」こんな感じでいいかな？」

「うん……ありがと」

と、言ってその場をそそそと去っていった

「つて……行つちやつたよ……まあ、良いか……俺も帰るー」

そして、部屋に戻ると、鬼の形相のマコアに「ひびく」散々な一日だったよ……

それでも……ケティはかわいかったな……

第6話～魔法はイメージなのですよ～（後書き）

今回のオリジナル魔法『歪な論舞』は迷いました。まず技名を単純に『スパイダーズ・ウェブ』にするかどうかで悩みましたね。でも、迷った挙句、『歪な論舞』にしました。はい、中二発言全開かもしれません。お恥ずかしい・・・ちなみに、魔力消費量は壁『ウォール』が一番高く、『カタナ』が一番低いです。今回の『歪な論舞』は消費量は『剣』で形を変えただけです。切れ味は『剣』の半分くらい。

第7話～テートだぜ～（前書き）

今回は本編にちょっと関係する。会話分が多め・・・最後は中一全開・・・詩人なんて向いてなかつた・・・ちなみに、ルーラとケティの身分はルーラのほうが大分低いと思つてください・・・そういうことで読んでください。戦闘描写はとも、苦手です。省けるだけ省いてると思ってください・・・すいません。分かりにくいかもですが、おれから精進したいと思ってます。後、金銭感覚がまつたく分かりません・・・なにこれ？見たいな感じです。すみません。

第7話～デートだぜ～

あの、事件以来ケティは僕と田を合わせると赤くなり田をそらしてしまった様になつた・・・
ま、まさか、あの告白聞いたわけじゃないよな？寝てたんだし・・・
うん、俺の勘違いだ！
そう決め付けて、俺の一日が始まった。

第7話～デートだぜ～

いやあ、今日も穏やかないい日だ。今日は虚無の日曜日。
いつもなら、ひじりる一日中寝ているところなのだが・・・
今日は！今日はなんと！

ケティとお出かけです！

（おひこえあー（〇）か yeahー）

『『主人嬉しそうだにや？』』

「嬉しいに決まってるだろ？男だぜ僕は。お前だつてメス猫に『トトに誘われたら嬉しいだろ？』

『うれしこトト。』

「トトにしつもんだ。」

『トトにしつか。わかつたに。』

「お前も一緒に連れてって俺の田をしつもいつ。」

『初めてのお仕事にトト。トトもいつ。』

「そう、それは昨日の」と・・・

回想中～～

「あの、ルーラ様・・・」
なぜか、顔を赤らめているケティ（超かわいかった）がおずおずと話しかけてくる。

「ん？ びついたんだケティ」

「あの・・・その・・・えーとお・・・
はつきりしないな・・・俺からも仕掛けてみるか・・・

「一緒に買い物でも行く？」

〔冗談三割、本気七割で言つてみたが・・・

「ルーラ様は人の心が読めるんですか？」

「あはは、そんなわけないだろ？
彼女もこれが言いたかったらしい。」

「じゃ、じゃーなんで・・・」

「ケティは言いたいことが顔にすぐ出るんだよ？
はい、毎回ながら嘘です。そんな事ありません。ただのあてっぽい
です。」

「うう～～～・・・」

と、拗ねたような子供みたいにかわいい声を上げる彼女がとてち、
かわいいぜ！～～

「で、行く？だめだつたら、別にいいけど・・・？」

「行きます！行かせてください！わ、私新しいお洋服が欲しくて・・・
・る、ルーラ様に一番を見て欲しくて・・・ダメですか？」

と、行つて弱涙目+上目遣いのケティに俺が勝てるはずない・・・
「おっけー、じゃ明日届行こつか？僕もケティに何か買ってあげた
いじ

「本ですか！？じゃー・・・私もルーラ様に何か買って上げます
ね？」

「そうしてくれると、嬉しいな？
と、約束をした。

回想終了~~~~~

そんなこんなで、俺は約束通り校門の前で彼女を待つ。
ここは、普通は女性を待たせるのはいけないな。

「あれ？ アンタ何してるのよ？」

そんなところにルイズが登場した。 いらないのにな、コイツ……

「あ？ 僕は今人待ってるの。」

「アンタが待つ人なんてたいした人じゃなさそうね。 ふん。」

「あのな。何回言えば分かる？ ケティを侮辱したら許さないぜ？」

俺は今言い気分なんだ。今はそこまで怒らないけど……

「で、お前は何してるの？」

「今から馬を借りに行くのよ。」

「遅くね？ もうと早く借りとけよ……」

「急に決まったことなんだからしようがないでしょー。」

「ああ、ああ、コイツ朝っぱらからうるさいな……」

「って、なに怒ってるんだよルイズ？ って、ルーラちゃん……ルイズはルーラが居ると怒るつてしまふのか……」

「なんで僕が原因なんだよ……」

「と、色々と講義していると……」

「あ、ルーラ様！待たせちゃいましたか？」
と、ようやくケティ登場！

「全然待つてないよ？今ルイズたちと話してたところだよ。」

「なんて、紳士フェイス作ってるのよあんた！」

「わへ、金魚じやないか。」

「ルーラお前一・ま、まま、ま」

- ۲۷۷ -

「まさか、ケティとテートなのかなよ！？！？！？」
声が大きいよ才人！

「才人声が大きい！」

「才人さん！！」

わざわざ
わざわざ

『ルーラがケティとデート！？』

『やうやく進展が！』

『あいつら見てるとむずがゆいんだよ！？』

『羨ましい！死にさらせルーラ！』

と、外野がああああ！やべえー！これ以上は、無理だ！

「け、ケティー！早く行こう！」

「は、ひやい！」

囁んでるんだよ、ちくしょうーかわいすぎだー！

そして、僕は事前に借りておいた馬に跨り、彼女に手をのばす。

「ほら。

そして、彼女は僕の手を掴み馬と一緒に跨る。

そして、僕の後ろに座り、僕の胸に手を回し抱きつく。

この時点でルーラのヒヤはピンチ！

そして、僕たちは学院を駆け出し始めた。

- ・ 学院から出て2時間くらい経つた。そして、今少しピンチである・
- ・ 乗り始めて最初の頃は別段話題に困っていなかつたのだが・・・
- ・ 今、話をしていない・・・なにか気まずい・・・まずい・・・
- ・ 気まずいのに・・・そうなのに・・・
- ・ 彼女の温もりを感じていると安心してしまつ自分がそこにいた。
- ・ 彼女の匂いが自分を包んでいた気がした。
- ・ 彼女の微かな胸の膨らみが背中に当たっている・・・
- ・ 彼女が揺れるたびに自分にもその振動が伝つてくる・・・

緊張してしまつ・・・ここまで密着したのは初めてだつた・・・
この前は肩で寝ていたが、そのときはいろんな人と話してたし・・・

しかし、後ろを見るわけにもいかない・・・後ろを見た瞬間馬から
落ちる気がする

後ろが見たい一心であるが、そつするわけにもいかない・・・
生殺しだ！

まず、なんで馬は一頭で良いと言つたのはケティだつた。
なぜだ！まさか、この生殺しを計画していたのか！恐ろしい！
いや、ケティに限つてそれはないだろう・・・

SIDEケティ

今私はルーラ様と馬に乗つています。
なぜ、一緒に乗つているかと云つて、この前友達に『ルーラ様と一緒に遠出をする場合は馬を一頭にしておいた方がいい』と言われた
からだ。

けど、まさか、こんなに気まずくなるとは思つてなかつたんです。

それにも、今も彼の温もりで安心している私がいる。
俺の背中はこんなに大きく、頼りのあるものだつたんです。
最初からそう・・・最初だつて、私を慰めてくれた（自分ではそう
言つてないが）、私のために決闘もしてくれた。
私は、この背中に頼つてばかりいたんですね・・・
そして、これからも頼つていいんですよね？ルーラ様・・・
けど、私も少しばかり頼つてくださいね？

やつとの思いで（精神的意味で）王都トリスティンに着いた。

彼女をそつと馬から下ろすと、目が合つてしまつ・・・
恥ずかしい・・・ケティも恥ずかしいのか、頬を染めてさつと降
りてしまつ。

うう・・・どうすればいいんだ・・・

自分も馬から降りる

「ケティ、大丈夫かい？ 疲れたりしては？」

「だ、大丈夫です・・・」

と、言つているが、明らかに顔が真つ赤です。

そんなんだと、俺も困ると思つてすこしきょろきょろしていつたが・・・

・
そなんです、視線が行つてしますんです。彼女の胸に・・・
彼女の胸に視線が行つてします。がんばつて、離そうとするが・・・
抗えない・・・

そんな俺に救いの手が！

ヒヒーン！

馬が鳴いた！！

サンクス馬！君は最高だ！

「ああ、ごめんごめん。今馬小屋に預けてあげるから。」

「やつですね。」めんなさこ馬さん。」

ヒビーン・・・

「イッシュ分かってやがるー。

そうこうして、馬を馬小屋に預けて城下町に出る。

「ケティの服を買つんだっけね？」

「は、はー。行くといひもつ決まつてますんで、早く行きましょ
う。」

「ああ。」

そんな感じでケティに案内を頼み、色々な洋服店を回つてこへ。

その中で色々とハプニングがあつた・・・

下着「一ナーとか・・・

どこに行つても恋人と間違えられるし・・・

でも、いい事もあつた。

どの服を着てもケティはかわいかつたし、そんな彼女を見れて良かつたと思う。

そして、そんな彼女はずつと笑顔だった。

そして、最後のイベントと思われるプレゼント交換の品を探してい
る最中である。

そんな時に

「よお、そこの貴族の坊ちゃんとその彼女さん

「はい？」

「こんなもの買つてかないかね？」
と、行つて露天販売のおっちゃんが俺たちに売りつけようとしているのは、一対の指輪と髪飾り。

両方とも翼のデザインがされている。

僕はそのデザインに惹かれたとともにその意味も知っていた。

「じゃー、それにしよう。」

「はい、毎度！ まけておくよー。」

そして、僕は金を5ドーラずつ合計1スウェーデン。

そして、受け取った髪飾りをケティに付けてあげる。

「ほり、ケティ。似合つてるよ。」

「そ、そりですか？」

「ほり、じつや別嬪さんじやないか！」

「だろ？ ケティが別嬪さんじやなけりやだれが別嬪なんだよ？」

「いやほや、じのじのの貴族様は別嬪さんばかりでさ

「その言い方だと今わつわも会つたみたいな言い方だな？」

「へえ、今わつわも珍しい桃色の髪の少女に会いました。
ルイズか・・・

「やつか。ありがとうございます。やつちゃん。じゃな
そいつでそこから出る。

「ルーラ様は指輪を付けないんですか？」

「ん？ 付けて欲しいのかい？」

「で、できれば・・・折角お揃いなので・・・」

「わかつたよ」

そして、指輪を指にはめる。

そして、我ながら問題発言をしたと黙つ・・・

「こいつが、この指輪、薬指にはめるのかな？」

「へ？」

彼女の声はまぬけだつた。

「え・・・あの・・・まだそういうことは考えてもなかつたし・・・
・あの・・・でも、ルーラ様とだつたら喜んで・・・」

最後のほうは全然聞き取れなかつた・・・

それでも、このときは彼女がどうこつた風に受け止めていたのかは知らなかつた。

後に、ギーシュに教えてもらいました。

「そ、そだーま、まだ私からプレゼントしませんね？」

「やつだね。なににしまじょう・・・？」

「うう・・・なににしまじょう・・・？」

「僕はケティからの物だつたら何でも嬉しいよ？」

「そういうのもらえると嬉しいんですけど……ちゃんと選びたいです……」

「わづだね。ゆっくり選んでいいよ？」

「はい」

そう言って、彼女は露天販売を物色していく。

「うーん、これもいい……けど、これも……」

そして、30分くらい悩んだ末に……

「これにします！」

と、言って勝つたのがこれ。

王冠のデザインのイヤリングと剣のデザインのイヤリング。

それを付けてもらおうとしたときだつた……不運だつたんだろうつ・

・

うをあ――――――!

と、人が吹っ飛んできた……

その人物は、なかなか筋肉質で、たぶん傭兵の類だ。

そんな彼を僕はケティを抱えちゃんとよけました。

そして、吹っ飛んできた方向を見ると……そこには才人で

した。

たしかに、才人はここに来るはずだったが……それがどう人を吹
つ飛ばすのにつながる……

SIDE才人

やべえ、ルイズに折角買つてもらつた剣デルフリングガを買つてもらつてウキウキ
してたら、不注意で人にぶつかってしまった……
それで、なにかルイズにけちを付け始めるからちょっと喧嘩ケンカ売つた
ら、見事に買つた……
そして、次に剣にいちゃもん付けるから切れで、そいつを吹つ飛ば
してしまつた……

しかし、吹つ飛ばした方向には人がいた！やべえ！よけてくれ！
と、思つたらそこにはもう人はいない……吹つ飛んだ男以外は……

つて、ルーラとケティちゃん！やつぱし、デートかー、デートなのか！

SIDEOUT

「才人じゃないか？何してるんだ？」

「いや、ちょっと喧嘩になつて……」

「喧嘩の度を越えてるぞ？」

「「「めん……」

「はつーざまあ、みなさい！平民どもめ！私の使い魔に勝とうなんて100年どころか1000年はやいのよ！ブリミル様の時代に戻つて修行し直してから来なさいよ！」

「そこの兄ちゃんもぐるかよ・・・」
ほらあ――――!

つて、なんか傭兵増えてる！今のルイズの発言のせいだろ！－
巻き込まれた！

「くそつ・・・ケティ、下がつて。おっちゃんのこの事見とい
てくれないか?頼む、ここの通りだ。」

「そ、そんな恐れ多いです！普通にしますんで！頭を上げてください！」

「ああ、ありがとうございます。では、お前ら、今からなら相手してあげるよ?」

「俺が最初だ！」

そういうて、大乱闘が始まつた・・・

それから、何人も何人も難ぎ倒し、切り倒し（死なない程度）。

最後の数人になると。

「坊主！コイツが人質だ！」
と、ケティの喉元にナイフを突きつけている男がいる。

「ケティ！お前！彼女を放せ！」

よこでは、おっちゃんは『ごめん』と言わんばかりに頭を下げまく
つている。彼のせいではない・・・一般人が傭兵に勝とうとするこ
と自体が無理なのだ・・・

そつちに気を取られている俺は、俺に向かってくる敵に反応を遅れ
た。

そして、吹っ飛ばされて、杖を奪われた・・・くそ・・・

「くつ！これで、お前はもう何もできない！」

「！」の娘どうするか？いい女だし、このままいただくか？

「ルーラ様！」

「ケティ！待つてろ・・・今行く・・・」

「杖のない貴族なんて相手じゃないんだよ！」

「才人！その剣貸せ！早く！」

「オウ！」

そして、才人が剣を投げる。

「相棒、俺の投げるんじゃねえー！」

インテリジョンス・ソードかよ・・・

「すまない・・・今だけ借りるぞ!」

「オウ!つて、アンタなかなかの使い手じゃないか?心もいい感じに震えまくつてるしよ。」

意味不明なことを言う劍だな・・・

「はつ!貴族に劍なんて使えるかよ!」

と、言って俺に突っ込んでくる傭兵一人。

「なめるな!俺は『ブレイド』しか使えないんだよ!」

そう、俺は劍は使える。というか、いつも劍を使っている。

「なつ!」
そして、俺は一人を切り倒すと、次、次と傭兵が来る。
一人一人を切り倒していく。峰打ちで胴を払い、首に当てる。

そして、最後の一人・・・

「おい!相棒その人質もつと役立つように使えよ!」

「わかった!へへっ!悪く思つなよお嬢ちゃん!おい、動くな!」
いつがどうなつてもいいのか!」

「くつ!」

ケティがあの状態じゃ何もできない・・・

「へっ!だから、女がいると男が廃れるんだよ!女はやるためだけにいるんだ!」

「違う！そんな、はない！お前らは間違ってる。」

「まちがってないね！現に今お前はあの嬢ちゃんによつて抑制されてる！」

「くそつ！」

くそつ、俺にもつと力があれば・・・もつと力が・・・
そして、俺は感情に任せ相手に剣を振るう

「くそ！この坊主つよい！おい、相棒！もつと、何かやれ！」

「分かつたぜ！」

そういうつて、彼がケティの喉もとのナイフを微かに動かす・・・
深紅のし雲が彼女の喉を走る・・・
そのとき、何かが切れた・・・
知らぬ間に俺は駆けていた・・・

「「「なつ！」」」

傭兵一人+デルフです。

俺は自分でも知らずに、もうケティの目の前にいた。

そして、自分でも知らずに一人目の傭兵を吹き飛ばし、今までに2人目を殴り飛ばした・・・
どうなつているんだ・・・
そして、騒ぎが治まる・・・
結果、傭兵（30人弱）は平民一人+貴族一人に負けてしまった・・・

「ケティ……大丈夫かい？」

「う……ヒック……グス……」

「ケティ……ごめん……」

僕は彼女にすまなかつた……自分にもつと力さえあれば……

「そ……そな……ヒック……ルーラ様が……謝ることじや……ないです」

「違つよ……僕が悪かつた……本当にごめん」

「謝りないでください！」

「け、ケティ？」

「なんで、ルーラ様は私に謝つてばかりなんですかー？なんで、私が感謝しないんですかー？」

「そ、それは……」

「私が年下だからですかー？違いますよねー？なら、なんですかー？」

「分からぬよ……ただ、僕には人に感謝する資格がない気がする……だけだ……」

「そんな資格ありません！兄弟に資格なんて要らないように！感謝

するのに資格なんてないんです！」

「だから……私に感謝してください……おねがいです……そうしないと……私が救われません……」
ケティ……そこまで僕のことを？

「わかった……じゃー、ケティ、今さつきのイヤリングを付けてくれないかな？」

「べ、別にいいですけど……」

そして、彼女は僕に近づき、僕の左耳に剣の「ザイレン」のイヤリングを付け、自分には王冠のイヤリングをつける。

「それじゃー、ケティ……」

「はー……」

待ちに待つた瞬間らしい……つか、周りの奴等いるんだけど……
そいつらもなんか『ゴクリ』とかいつてるんだが……

「今まで……本当にありがと。そして、これからもよろしくな。

」
そして、俺は彼女の唇に自分の唇を宛行う（あでがう）。自分に足りなかつた何かが補われるような感覚……今までに一番彼女の温もりを感じる……一段と心臓が跳ね上がる……一生放したくなくなる……その一瞬は何秒にも感じられ……しかし、それは一瞬であった……
唇を離すと……

「あ……」

と、少し名残惜しそうにケティが声を出す。

「これで、おあいこかな？」

「そ、そうですね……はい、そうです！」

こっちもかなり、かなーり！恥かしかったです。けど、なんか衝動に駆られました……

そして、俺たちの初めてのデートはキスで締めくくられた……周りからの拍手もあつたが……

SIDE才人

ルーラとケティがキスをしている……
な、なんて羨ますい————！
お、俺もルイズと！——いつか！

「な、なあ、ルイズ？」

「しないわよ？」

ぐはっ！なぜだ！見破られた！？

「そんなんじゃねえよーあのさ、ルーラとケティがしてるアクセサリーなんだけど。」

「ああ、あれ？」

そう、あのアクセサリーになにか意味があるのだと俺は感じた。

「あれはね、ちゃんと意味があるのよ……」

「どうな?」

「しかも、いやこと組み合わせがあつてるのがす」このとく・・・

「組み合わせ?」

「アハーまあ、あの王冠のイヤリングは『王』を表すわ。ケティの場合王女か、女王。アハ、剣のイヤリングは『騎士』を表す。」

「へえ・・・それで?」

「翼の髪飾りと、指輪は、『自由』の象徴。つまり、その二つを組み合わせると・・・」

「組み合わせると?」

「それへりご分かりなさいよ・・・」

「はーーー教えてよーーー」

「もう、ここーーー」

なんなんだよーーーの貴族はーー

SHEDENOBODY

それは、夢、はるか昔からの・・・

SHEDENOBODY

騎士に恋をした王女・・・
王女に恋をした騎士・・・
許されない恋があつた・・・
二人は激しく願つた・・・
自由が欲しいと・・・

しかし、その二人の願いはどこか夢く・・・
すぐに、碎かれてしまつた・・・

身分の違う二人の仲は裂かれた。

二人はこの世を呪つた・・・自由なんてないのだと・・・

しかし、ルーラは願つた・・・
例え、自分と彼女の身分が違えど・・・
自分の手で、自由を勝ち取つてみると・・・
身分の差すらも取り壊して・・・
その王女を救つてみせると・・・

第7話～テートだぜ～（後書き）

キスシーンなんて、初めてでした・・・
最後の詩っぽいものは気にしないでください・・・
駄文なんで理解に難があるとおもいまして、最後に補足説明みたい
な感じで・・・

第8話～俺の心、そしてフーケ……（前書き）

いやあー。作者は海外でインターナショナルスクールなんで今夏休み真っ最中です。でも、明日から日本に行き、PCがない状態に！もしかしたら、日本でも新しいPCで更新するかもです。悪ければ1ヶ月のストップがあるかも・・・それでも、読んでくださるところしいです。

第8話～俺の心、そしてフーケ……

数時間前俺はケティを助ける一心で駆けた……
自分でも知らず……自分でも信じられないくらい早く……
人が見えないくらいの速度で……

でも、今はそれに驚いた……

その速さにじやなく……その行為に。

僕も人のために怒り、人のために行動できる人間だったのだと。

第8話～俺の心、そしてフーケ……

デルフは言った……

『オウ！って、アンタなかなかの使い手じゃないか？心もいい感じに震えまくつてるしよ。』

心の振るえ……気になる……

そして、その一心で俺は自分の部屋を後にした。

ルイズの部屋

今はルイズの部屋のドアの前に立っているんだが……

中がうるさい……異様にうるさい……
何事だよ？まさか、女子寮でこれが普通？
俺の常識を返せ！

そして、俺がドアノブに手をかけ、開けようとした瞬間
ドアが開いた……
その先にはタバサがいた。

「こんばんわ」

「…………こんばんわ、タバサ」
あれえ？なんで分かつたのかな？

「気配」

お前は俺の心が読めるのか！？

「読める」

「ええ！」

「嘘……」

嘘かよ！？

「びっくりした……」

つて、周りの人たちなに？見せ物じやねえよー

「タバサと普通に話してる……」

才人、それはタバサに失礼じゃないか？

「アンタタバサと面識あつたの？」

ルイズ、それは俺を侮辱してるな？俺の人脈はそこまで浅くねえよ！たぶん・・・きっと・・・

「ダーリン以外は興味ないわ」
どうでもいいよそんなの！つか、ダーリンって！？キュルケに遂に一人の男性が！？

「ダーリンって？」

「ダーリンはダーリンよ？」

「会話になつてない・・・」

「ああ、たぶん俺のことだ・・・
なつ！才人だと！？」

「才人・・・君は男子の10人くらいを敵に回したのか・・・僕でもさすがにそれは助けられないよ・・・」

「なつ！そんなに深刻な問題！？」

「貴族つてのはプライドが高く根に持つタイプが多いんだ・・・自分の女だと思つてた奴が取られたら怒るよ・・・特にトリステインの貴族は・・・」

「ちょっと、何よその『トリステインの貴族は』っての！？」

「その通りだと思つわよ？ミスター・ルーラはよく分かつていらっしゃるのね？」

「その言葉遣いやめてくれない？それと、それくらい普通だと思つんだよね？俺貴族やめたくなつてきた・・・」

「あら、それならゲルマニアで貴族やれば？お金さえあれば大丈夫よ？」

「だから、ゲルマニアは野蛮って言われるのよー。」

「由緒正しき貴族だけが貴族つて言つてるトロステインはそのおかげで衰退してるけどね。」

と、色々と講義していると

「あのおー？で、ルーラは何をしに来たんだ？」
と、才人が助けてくれました・・・ありがとう、才人・・・助けてあげないけど・・・

「ああ、お前の『テルフリンクガ』に用があるんだ」

「テルフに？」

そう言つて、『テルフ』を「ほい」と言つて投げてくる。

「相棒！だから、俺は投げるものじやねえ！」

「「めん」「めん」

「で、坊主。俺様になんの用だ？」

「お前が言つていた『心の振るえ』とはなんだ？」

「その通りだ坊主。心の動きのこつた。怒り、悲しみ、嫉妬なんで

も良い。心が動く感情なら何でも良い。」「

「さうか……なら、最後のあれは、お前がやったのか？」

「なほすないだろ？俺様もびっくりだつたぜ？普通の人間に出来る速さじゃない……」「

「じゃー、なんだつたんだうつ……」「

「さあな……それにしても、坊主おもしれえ体してるな？なんだそれ？」

「体？なんのことだ？」

「体？知らないぜ、そんなこと？」

「まあ、知らないんならそれでいいや。」「

「おい、そこまで言つといておあずけなの？」

「そんなこんなで、その後ルイズとキュルケが才人の使う剣についてもめ始めた……

「俺はデルフの方がいいと思つけどな……

「おう、坊主分かつてるじゃねえか」

「アンタの意見なんて聞いてないのよー。」「

「私の剣がだめだつて言つのー。」「

「え……あ……」

—

そして、もめじとの收拾として

才人かローブで吊るされ、魔法でそのローブを切ったほうが勝ちらしい・・・

才人かわいそーだな。
非常にかわいそーだ。
同情しかねない。
・
・
・

少し後のこと・・・

なんだか、俺たちの目の前にでかいゴーレムがいます。ルイズが爆破した壁を殴つて突き破り、その腕をつたつて、人が中に入つて出て行きました。

あそこ宝物庫じゃん！どうすんだよーくそー！

「タバサ！ シルフィードで才人とルイズを空に運んでくれ！ ルイズお前は空から爆撃！ キュルケお前はしたから炎で牽制頼む！」

「なんで、アンタが仕切ってるのよー。」

「分かつた」

タバサ、君は何て良い子なんだ！

そういうわけで、タバサはルイスの服の襟を摑み、才人に『レビテーション』をかけ、飛び立つ。

「ちよつと、不本意だけど、今は『雪風』と聞いてあげるわ。」

「ありがとう、キュルケ」

「で、アンタはなにするのよ? まわか、見てるだけ?」

「俺はゴーレムの上にいる人間のところへ行つてくる」

「じつやつとよ? あんな高こりで『フライ』なじじやこけないわよ?」

「まあ、見てるつて」

俺には秘策があつた。高いところに行くことができる。

俺は短くブレイドを詠唱し、形を変え始める。ロープのように細く、長く。先端を尖らせ。

その先端をゴーレムの肩あたりに刺し、形を元の剣に戻していく。そうすると、どうだらつ。杖がひっぱられ、自分で浮くのだ。そして、易々とゴーレムの肩まで登り術者と対面する。

「これで終わりだ! 誰だか知らないけど!」

「私は土くれのフーケだよ! けど、こんなところでは終れないわ!」

・
ちつ、やはり、やつか・・・ゴーレム見た時点で分かつてたけど・・

けど、さすがは盗賊。身のこなしだけで、僕のブレイドを避けるとは・・・普通のメイジとは一味違う。

「顔を隠して! 素顔を見せやうよ!」

「嫌だね！ それじゃ、商売できないだろ！」

と、怒鳴りあいながら僕が切りかかり、フーケがそれを避ける。この繰り返しだった。

しかし、キュルケやルイズのおかげでゴーレムが一度激しく揺れ、フーケのフードが取れる。

そこに見えた顔は・・・

「ミス・ロングビル？」

ミス・ロングビルであつた。学院長の秘書だ。

「見られたんならしょうがない！ 恨むなよ少年！」

そして、彼女は固まつている僕を蹴り飛ばし、僕はゴーレムから落ちる。

当然、さつきのロープで落下を阻止することはできた。

しかし、俺は今パニックに陥っていた。フーケがミス・ロングビルで、ミス・ロングビルがフーケで・・・

「うわあ――――！」

俺は真っ逆さまに落ちていった。

SIDEタバサ

彼からの指示に従つたわけは、それが一番いい選択だつたからだ。今戦闘力未知数の使い魔と役に立たないメイジは私が空に持つていき、空からの援護射撃。

下はキュルケの炎による牽制、そして、彼が犯人に接近。一番分かりやすく、役割分担が楽だ。

しかし、その作戦の要の彼がフーケに突き飛ばされ地面に急降下している。

あの高さから落ちたら間違いなく死ぬ。

間に合つて・・・彼を今死なすわけにはいかない気がする。まだ、彼は何かを知っている・・・知るだろう・・・だから、間に合つて。

私は唱えた『レビテーシヨン』。

彼が落ちる速度が下がつた、しかし、高さが足りなかつた・・・減速した次の瞬間・・・彼は頭から地に落ちてしまった。

SIDE OUT

SIDE才人

魔法つてすげえ・・・あんなにでかい石の人形ができるなんて・・・しかも、残つたのは土だけ・・・卑怯だろ！

そして、もう一つ驚いたことは・・・ルーラだ・・・ルーラが術者（フーケと言づらしい）にゴーレムから突き落とされ25メートル（才人内だとメートル）落ちたことだ。しかも、頭ら落ちたらしく今も意識不明のまま保健室に連れてかれた。

この事件はまだ、生徒には言われていない。

明日の朝公開するらしい。まあ、最初にケティに書いたほうがいいと思うんだけど……

「なあ、ルイズ？」

「なによ？」

「なんか不機嫌だな？ なにかあったか？」

「なにかあったか！？ あつたじゃない！？ なんで私は空から安全に援護爆撃でツェルプストーが牽制なのよ！？」

「それは、適材適所だろ？ それでは、ルーラのことなんだけど……」

「

「どうしたのよ？」

「ケティに言わなくていいのかな……」

「まだ、言わない方がいいわ……」

「なんでだよ？ 言つたほうがいいだろ？」

「田が覚めて、案外ケロつとしてたらそれでいいし……一生田覚めないかもしけないわ……」

「不吉な事言つなよ……」

「なんでも、ありえるのよ……」

「そもそもな……」

• • • • • • •

無事たどりした

次の日

俺達、ルイズ、俺、タバサ、キュルケはまず、朝一に保健室に寄つていつた。

ハリスのお原舞いと詠かかることはなく様子を見に来た

「お邪魔します」

保健室一二きの先生たゞ二が

「で、ルーラの様子は？」

単刀直入に挨拶なんてしない
とにかく川口へた

「今はもう、水の流れも穏やかになつて起こそうと思えば起こそせる
んだけど・・・と、いつか今さつ起きたんだけど・・・」

「なにがあつたんですか？」

「あの……とっても言いづら何んだけど……彼……」

「記憶を失つてゐるわ・・・」

SIDEタバサ

今なんて？

「記憶がない？」

「ええ、残念だけど・・・自分の名前すら忘れてたわ・・・そのあとすぐ眠らせたけど・・・もしかしたら、一時的にショック状態で記憶を失ったのかもしれないから・・・」

「本当？」

「ええ、本当」

「今から会える？」

「会えるけど・・・やめたほうが・・・」

「会う」

強引だけど、彼の知識はまだ必要。

「ずいぶんと強引なのねタバサ。そんなに彼のこと気に入っちゃつた。」

「うん」

「本当に気に入ったのね。けど、彼もう相手がいるわよ？」

「それでも、かまわない」

今はとにかく会えればいい・・・

「じゃー、ソラちに来て頂戴。会わせてあげるから。」

そして、私たちは一つのベッドに近づいていった。
そして、先生がそのカーテンを開くと、外傷一つ見えない彼が寝ていた。

「傷は？」

「傷は直せたわ、でも・・・」

「死」

そして、私は彼に近づいて

「起きて」

と、彼に話しかける。

「ん・・・」
彼が目を少しづつ開ける

「ちょっとタバサそれは強引過ぎない？」

「これぐらいしないと起きない」
そして、彼が上体を起こし壁に寄りかかり

「どなたですか？」

と、聞いてくる。それは、何も知らない子供のような無垢な田で。

「本当に覚えてない？」

「だから、どなたですか？」

「覚えてないみたいね。」

「もつ少しことの重要性を感じて欲しい・・・

「まじかよ・・・」

『まじ』とはなんだらか、後で聞いく。

「まさかね・・・」

そこまで、残念そうにしてない・・・薄情？

「本当に残念だけど・・・」

「先生のせいじゃない」

「ありがと。ミス・タバサ・・・」

「だから、なんなんですか、あなたたちは？」
「違うがない・・・」

「私たちはあなたの学友。」

「本当ですか？」

「本当。思い出してみて？」

「思い出す・・・」

彼が考え始めた。思い出せれば、それでいい。が、無理だった。

「すいません・・・なにも思い出せません・・・」

「そう、なら良い。思い出す努力をするだけ。」

「はい・・・」
それから、彼に説明を始めた。

彼が、ルーラ・ルイ・ラーケで、ギーシュを負かしたこと。
魔法が使えず、ブレイドしか使えないこと。

貴族というもの。私たちのこと。

そして、フーケのこと。フーケによつて突き落とされ記憶を失つたこと。

説明が終ると。

「そうですか・・・」

と、なにか他人事のように言つてゐる。まあ、今は他人かもしれない・・・

そして、

「で、このアクセサリーはなんなんでしょう？」

と、聞いてきた。私は知らない。ルイズのほうを向くと。彼女は知つてゐるらしい。

「それは、あなたとケティがおそりで付けてるアクセサリーよ。
昨日買ったばかりなんだけど・・・」
ルイズが説明してくれた。そうだったのか・・・

「ケティといふと？」

「あなたの彼女よ

「僕に彼女が？」

「ええ、それはもうラブラブだったわよ？昨日キスもしてたし

「・・・・・」

「彼が赤くなっている。恥ずかしいのだろう・・・
この後は、話が続かなくなり先生によつて、打ち切られた。
なんでも、学院長が呼んでもるとか、なんとか・・・

「彼は？」

「ルーラ君も少しだつたら行くわ

「分かりました」

そう言つて、私たちは退出した。

今朝起きたとき、何がなんだか分からなかつた。

SIDE OUT

しらない天井、見覚えのない手、意識が薄い頭・・・
しらずと、呻いていた

「う・・・」

すると、一人の女性が現れた

「起きたのね、ミスター・ルーラ」

「ルーラ？誰ですかそれ？」

何を言つているのだろう？

そういえば、僕は誰だろう？

ここはどこ？

「まさか、記憶が・・・！」

「ちょっと、記憶つて！」

「仕方ありません・・・『スリープ・クラウド』」

そして、僕の意識は刈り取られた

次起きると、そこには蒼い髪の少女とその取り巻きがいた。

そして、その人たちに僕と言う人を教えられ、記憶のない理由も教えられた。魔法が一つしか使えないことも。

一番衝撃的だったのが、僕の彼女だった。ケティと言つ名前らしい。しかも、昨日アクセサリーを買って、しかもキスもしたらしい・・・恥ずかしい。

それから、その人たちが誰かに呼ばれ退出していった。

そして、僕も先生にいくつかの説明を受けた。
貴族を侮辱しないこと。

今まで自分が起こしたいざいざでなにか起きたときの対処法。
ギーシュが来たら学院長に呼ばれていると言えばいい。
ケティが来たら・・・正直に言つべきであると。

そして、僕もタバサたちを追つて学院長室に向かつた。

学院の廊下

学院長室の場所は先生に教えてもらつていた。
そこに、俺はせつせと足を運んでいたのだが・・・
これは、たぶん神様のいたずらだったのだろう・・・
途中でケティを遭遇した・・・

「る、ルーラ様！だ、大丈夫ですか？昨日フーケと交戦したと聞い
たんですけど・・・って、ルーラ様？」

僕は今、あのイヤリングと指輪をしていない・・・それが、せめて
の昨日までの僕との決別。

「君がケティかい？」

「る、ルーラ様、なにを言つてるんですか？」

「本当にすまないと思つてゐる。けど・・・
本当にすまないと思つてゐる。けど、言わないときつと君はもっと傷つくよ。
・・・

「僕はもつ昨日までの僕じゃなくなつてしまつたんだ・・・」

「ど、どいつ意味ですか！？」

「だから、僕にこれを着ける資格はないよ・・・だから、君に返すことにする」

と、言つて彼女の手に強引にアクセサリーを握らせ僕はその場を後にする。

突き当たりを過ぎたところで

「本当にすまない・・・」

と言つたのは誰にも知られていない。

そして、ケティがその場で崩れ落ちていたのは見ていたくなかったので、早足で学院長室に向かつた。

SIDEケティ

今朝友達からルーラ様がフーケと交戦して怪我をしたらしいと聞いてからとても不安だつた。

朝食にも来ていなかつたし、学友たちも見られませんでした。

だから、廊下で会つたときはなにも傷がなくとも安心したんです。

でも・・・でも・・・ルーラ様は私のことを忘れてしまつたとおつしゃいました。

自分には、あれらのアクセサリーをつける資格がないと・・・

また『資格』という言葉を使いました。昨日までの彼なら絶対に使わないと思っていた言葉をあっさり使つたのです。

信じたくなかった。でも、信じるしかなかつた・・・

彼が返してきたイヤリングと指輪を見て、私は悲しくなり、泣いてしまった・・・

友達に慰められても、泣き止むことはなかつた・・・
たぶん、私はまたルーラ様に慰められることを待つていたから。
それまで、ずっと泣いていようと思つてしまつたから。

SIDE OUT

僕は学院長室に着き、ノックをすると、中から。

「ルーラ君じやな？ 入つてよろしいぞ。」
と言つ声で僕は中に入った。

中には、今さつきあつたタバサたちと教師たちが全員集まつていた。
なにやら、ルイズが杖を上げている。

「お待たせしました。」

「よいよい。して、調子はどうじや？」

「人を泣かせるのはとてもつらいと痛感しています・・・
と、今の心情をそのまま伝える

「おまえ、まさかケティに・・・それに、アクセサリーも
と、才人が恐る恐る聞いてくる

「その通りだよ・・・彼女を騙すこと自体が彼女を傷つける・・・
だから、返してきた・・・僕はもう彼女の知る僕じゃないんだから・・・

・・・

そういうて会話を打ち切る。

「で、今は何をしているんですか?」

「ミス・ロングビルが情報を入手しての。今からフーケを捕まえに行くつもりじゃ。それで、ミス・ヴァリエールが立候補したんじゃが・・・」

なぜかミス・ロングビルと呼ばれる教師が僕を睨んでいる。どうしたんだろう?

「私も行くわよ。」

と、キュルケが杖を上げる。

「私も」

と、タバサまで。

「じゃー、僕も」

と、言って僕も上げる。

「君も行くのかの?」

「フーケに会えばなにか分かるかもしないし、ここにいてもまたケティに会つてしまふかもしない・・・」

「そうか、そうか」

それから、戦力の説明を受けた。

盗まれた品は二つ『破壊の杖』と『開かずノ本』。

キュルケは、有名なツエルプストー家で火のトライアングル。タバサは既にシュヴェリエの称号を獲得。

ルイズは、強い使い魔をもつている。
俺はおまけ。

そして、今はミス・ロングビルの言つた森に向かっている馬車に乗つ
ている途中だ。

今日はフリッグの舞踏会らしい。まあ、舞踏会だ。
はあ、何か思い出せるといいな・・・

第8話～俺の心、そしてフーケ……（後書き）

今日は後2回くらい更新するつもりです。ええと、色々と理不尽なところがあるかもしれません…未熟ゆえです。お許しください。次回はフーケ編終了かと？

第9話～心からの帰還、トラブルの後の「人の仲はより深まるとかなんとか～

いやあー、なんだか色々とおかしいかもしだせんが・・・と、言うか、作者は恋愛経験なしなんで全然分かりません・・・すいません・・・

第9話～心からの帰還、トラブルの後の「一人の仲はより深まるとかなんとか～

今日は空が澄み切っていた。

蒼く、青く、どこまでも続いていそうだった。

僕の頭の中は白かった。

白く、空虚で何もなく、どこまでも続いていた。

その片隅に一人の少女はいた。

今の僕では、気付くことすらできないくらい小さな…

第9話～心からの帰還、トラブルの後の「一人の仲はより深まるとかなんとか？」

曰く、4時間で着く森にフーケがいる。

曰く、黒ずくめのローブである。

曰く、宝物庫から2品盗んだ。

そんなフーケを探し僕たちがやつてきた。

森の中を徒步で進み、一つのボロ小屋を見つけた。

その中にフーケが潜んでいると。

そして、そこに向かうのは一番すばしつこい人物。

つまり、才人だ・・・同情しかねない・・・

こんな感情抱いたことはあったのだろうか？どうなのだろう？

才人がすばやく小屋の窓に近づき中を見て、誰もいないのを確認。僕たちを呼ぶ。ルイズは小屋の外の見回り、ミス・ロングビルは小屋以外の森の見回り。

僕、タバサとキュルケで小屋の中を調べる。

「あつた」

タバサが言った。

「本当？ なにかあつけないわね？」

と、キュルケもそれを見る。

たしかに、それは『破壊の杖』だった。

「へえ、これが『破壊の杖』ね……全然なにも感じないわ？ これ本当にお宝？」

「わからない」

彼女等二人はその宝に注目している。

そして、僕はもう一つの『開かずノ本』を探している。

ベッドの下、タンスの中、机の後ろ。探しも出てこない。そんな時、外から

「きやあああ！！！」

ルイズの悲鳴が聞こえ、小屋の屋根が吹き飛ぶ。見えたのは、岩でできた巨大な手。

その指の一本が欠け、その岩が小屋の床を貫く、そして、そこに現れたのは一冊の本……『開かずノ本』であった。

僕は、その本を取り、逃げようとしたところだった・・・
世界が黒に支配された・・・田の前が見えなくなつた・・・
頭の中に声が響いた。

『 我の声が聞こえる物よ・・・そなたは力を望むか?』

「ち・・・か・・・ら?」

『 力だ。そなたはそう思ったことはないか?力が欲しい、と。』

「僕は・・・」

『 ふむ、そなたは記憶を失つたと見えるの?まあ、直してやる!』
サービスだ。』

「な、なにを」

と、言おうとした瞬間、頭に電撃が走つた。

頭が割れそうだった、痛い、痛い、イタイイタイイタイイタイイタイ!!

「ぐつ・・・はきそうだ・・・」

『 思い出したかの?』

「ああ、おかげさまでね・・・早く帰らないと・・・僕はまたケテ
イを傷つけてしまつたんだ・・・くそつ!」

『まあ、まあ。話を聞け。そなたは力を欲すか?』

「力、といつと。どれは、どんな力だ?」

『そなたが欲する力だ』

「それは、なんなんだよ！」

『それは、そなたが一番知っているはずじゃ。』

「僕の欲しい力・・・」

僕は何が欲しいんだ・・・

一番最初に頭に浮かんだのはケティだった・・・今は彼女のことしか考えれないらしい・・・

僕はケティに何をしてあげたいんだ・・・彼女を守つてあげたい・・・

僕が欲しい力とは？彼女を守る力か？違う、彼女だけじゃない・・・僕の守りたいものすべてを守る力だ・・・

『わかったようじゃな。では、そなたに力を与えよう。しかし、覚悟を決めよ！この力ただではないぞ！』

そういうて、僕の身体に何かが流れ込んできた・・・

SIDE才人

俺がルイズの悲鳴を聞いて外に飛び出するとそこにいたのは全長30メートル級のゴーレム。

この前見た奴だ！しかも、やべえルイズが！

「ルイズ逃げる！」

「いやよー私は逃げないわ！」

「このやるうーやろうじゃないけど！」

俺はルイスに近づき持ち上げ、走り出す。タバサのところまで持ち帰る。

「タバサ。あれ？ ルーラは？」

106

ルニテはセレニテイタんだヌミ?

そのとき、何の声だか分からなかつた。
しかし、この方向を見るとそこにいたのはルーラだつた。
ルーラが持つっていた本を開いていた。

「あの本つて『開かずノ本』じゃないの？開いてるじゃん？」

「開かないはずよー私も試したものー」
と、ルイズが言う。

「私も試したわ」

「私毛」

たぶん、授業で触る機会でもあつたんだろう・・・

「じゃー、なんで」

「ふん！そー」の小僧！悪く思つなよ！」

やべえ！ フーケがルーテを狙ってる！

ゴーレムは左腕を掲げ、それをルーラに向かつて落とす。

ガン！

しかし、そのつ 拳は空中で止まつた。

まるで川口と拳の間に壁でもあるように

「「「なつ！-！-！」」

驚いているのを見るとあれは、変らしい。

西行の死と死後

ルーラは自分の胸部分の服を握り閉め膝を突きしづくまつて いる。

「なんだよ！ あれは！」

「し、知らないわよ！」

「とにかく今はフーケのほうが先よ!」
と、言ってキルケの判断により、フーケのゴーレムを先に倒すことになった。

SIDE OUT

SIDEタバサ

あれは異様だった。

彼の周りに渦巻く魔力。

まるで、それは闇そのものを表したかのような魔力。
魔力の密度が濃くなり具現化した現象。魔力の壁ができた。

しかし、彼はまだ苦しんでいる。

なぜ、彼には本が開いたんだろう。

1年のとき私が試しに先生に隠れて開けようとしたときは全然開か
なかつたのに・・・
彼はなにか特別?たしかに、特別だった。魔法が使えない・・・悪
く特別だった。

それよりも今はゴーレムに集中しなければ・・・
死んでしまつたら彼に質問すらできない・・・
今の彼なら攻撃は受けないだろう・・・

SIDE OUT

SIDEキュルケ

なんなのよあれ!

あんな恐ろしい魔力見たことないわ！

しかも、私が1年のときにふざけて開けようとした本まで開けているし！

なんなのよあいつは！私の剣にはケチつけるし！

つて、今はそれどころじゃない！

今は目の前のゴーレムをどうかしないといけないんだったわ。死んでたまるもんですか！？

SIDE OUT

SIDE LZ

いつもイライラさせる、ルーラは記憶がなくなり、いなくなつた。そして、新生ルーラは私の下僕にでも仕立てようかと思つてた。けど、今はどうだらう？あんな不気味なのいらぬいと思つてゐる。あんな魔力みたことない・・・不気味で、不純で・・・見ていて吐き気がする。

しかも、私が一年のときツェルブストーに対抗して開けようとした本まで開けるし！

なんなのよ！『開かずノ本』なんて、ただの嘘つぱちじゃない！

SIDE OUT

僕の身体に何かが流れ込んできた。

それは、感情だつた。

悲しみ、苦しみ、嫉妬、喜び、怒り、哀れみ。

しかし、一番多かつたのが嫉妬だつた・・・

この本は『開かずノ本』と言つのは、開かないから着いた名前だ。

実際の名前は『深淵の書』

曰く、人の感情が記されている。

曰く、その多くが嫉妬の思念。

曰く、1000年前のもの。

曰く、妬みこそが人間の真理。

その感情すべてを受け止める。

それがあれの言つていた『覚悟』なんだろう。

やつてやろうじゃないか！

僕のすべてをかけてやつてもいい、僕は守つてみせる！

僕が守りたいものを！守る力を手に入れてみせる！

そして、僕と感情との抗争が始まった。

氣を緩めたら僕が乗つ取られてしまう。

乗つ取られたら最後・・・嫉妬の思いで人を殺すことになる。

何時間経つただろうか・・・

そう、感じさせたのは自分の精神世界にのめり込んでいたからで、
実際外の時間だとそれは5分にも満たない時間だ。

人々の嫉妬の声が聞こえた・・・

『『『あいつらが憎い！』』』

『俺だつて、環境があれば・・・』

『私だつてあれくらいの容姿があれば！』

『俺に金があれば！』

苦しい・・・・・うるさい・・・・僕に言つな！

『『『お前もそう思うだろー。』』』

「ち・・・・がう・・・・」

『『『なんだと！？』』』

「僕は・・・学んだ・・・人には完璧なんてない・・・かけている部分があつて当然だ・・・必要なのは、その自分と付き合っていくことだ・・・人を嫉妬するのも悪くない・・・ただ、嫉妬した後はどうだ？そのあと、お前らは何かしたか？相手を殺した？ふざけるな！」

僕はいつの間にか声を張り上げていた。

「殺してなになる！殺してお前がどうなる！なにも変わらない！ひとを悲しませるだけだ！僕は学んだ！人を嫉妬した後に自分が何をすべきか！嫉妬して、相手を憎んだ後！・・・その人に近づこうと努力するのを・・・」

最後は泣きかけていた・・・コイツラは僕のおんなじだつた・・・ただ、コイツラにはケティのような人物が現れなく・・・人を守りたいと思わなかつただけだつた・・・僕もコイツラになつていたかもしれない・・・

「だから、僕に力をくれ！それを僕に教えてくれた人を僕は守りたいんだ！この世の中から！」

そして、感情たちは静まり、元の黒い世界に戻つた。

『そなたの答えしかと受け取つた。そなたに力を与えた。』

「本当か？」

『ああ、本当じゃ。今からこの本の姿を変える。肌身離さずもつていろ。それに聞けばわかる。時がくればな』

「分かつた。ありがとう」

『ふん。感情の集まりである我にはそのような言葉意味がないぞ・・・しかし、そこまで悪い気分でもない・・・それでは、またいつか会おうではないかルーラ・ルイ・ラーク。我等を深淵から救つた主よ』

そして、世界は元の世界に戻り、僕の指には指輪がはまつていて。才人たちがゴーレムと戦つていて・・・

指輪から情報が流れる・・・

『肉体強化』

効果：筋力などの一時的向上

副作用：疲れる

弱点：一時的ということ

操作法：身体に流れる魔力の操作により向上したい箇所に魔力を集中させるイメージ。

指輪はちゃんと動いている。

指輪に描かれているのは炎・・・赤い、嫉妬の炎・・・僕の心のようだつた・・・

僕は駆けた。あの時のように・・・

今は早く学院に戻りたい。その一心でゴーレムが邪魔だった。

「 ん、 ルーラー ー つて、 本は ー 」

「 今はそれどこかじゃないだろー 集中しろー 僕が足止めをするから 何かしてくれー 」

「 つて、 なんかお前変わつてない? 」

「 変わつてないよー 元に戻つたと言つて欲しいー 」

「 つて、 記憶戻つたのかよー 」

「 ああ、 おかげさまでー 」

僕は、 ゴーレムに突つ込む。

足に魔力を集中するイメージ・・・

そして、 跳ぶ・・・ 周りからしたら飛びように見えるだろ? が・・・

一気に25メイルくらい飛び肩に乗る。

そこにいたのはフーケだった。心底驚いている。

「 よお、 また会つたなフーケ! いや、 ミス・ロングビル! 」

「 なつー! あんた、 記憶が戻つたのかー 」

「 おかげさまでー 」

そして、 僕は杖がないのでフーケに殴りかかる。今回はおまけだつたから戦闘なんて想定していなかつたし。

「 らあー 」

しかし、 まあブレイドも避けられるんだから拳なんてたやすい。

僕の役割は倒すことじゃなく、足止め。それでいい、ずっと避けさせていればいい。

肩の上と言う狭い空間で僕はフーケを幾度となく殴る。そんな、僕に声が掛かる

「ルーラー…どいてくれ！」

その声で僕はゴーレムの肩から飛び降りた。

そして、着地の瞬間に足に魔力を集中させ、着地便利だな・・・

そして、僕が着地したあと、凄まじい爆音がした。ルイズか？と一瞬思ったが、彼女自体あっけを取られている。

後ろを向くと、才人が破壊の杖を肩に構えていた。

その状態を見ると、才人が破壊の杖でゴーレムを破壊したのだろう。まあ、どうあれ、これで、一件落着だ・・・

ミス・ロングビルはつかまり。僕たちは今帰り道の馬車の中。

「ふ、ルーラ本當に記憶戻ったのか？」

「ああ、戻つたって言つただろ？」

「よかつたあ・・・」

才人ありがとう・・・

「で、アンタ今さつきの何？なにあれ、あんた飛んだじゃない？」

「違うよ。僕は跳んだんだ。ただのジャンプだよ。」

「はあー！あんたバカにしてるの？ジャンプであそこまでこけるはずないじゃない！ふざけないでよー！」

「いや、本当にただのジャンプだつてー！」

「嘘よ嘘ー！」

彼等にあの本のことを言つわけにはいかない・・・
まずは、学院長に報告だ。

学院長室

「ただいま、戻りました学院長」

「おお、よく戻ってきた。ワシからも礼を言つた。ありがとうございます
「いえいえ、僕も収穫がありましたし。あ、それと記憶もどりまし
た。」

「それは、本当かの？それは良かった」と、学院長に報告する。

フーケがミス・ロングビルだつたこと。
僕たちにショヴェリエの称号が送られるらしい。

そして、報告を終つると、

「学院長、あなたにお話しがある。」

「あ、俺も」
と、僕と才人が両方言つ。

「わかつたぞい。では、行つてよいぞ」
と、言つて他のものを部屋から追い出す。

「で、話とは？」

「ええーと、まず俺から」
と、言つて才人が話し出す。

曰く、あの『破壊の杖』は才人の世界の武器。
曰く、あれは学院長の命の恩人の品。
曰く、その人物はワイヤーバーンを一発で殺した。
曰く、その人物は死んだ。
才人はがっくしと肩を落とし、部屋から退出。

「で、君は？」

と、言つて僕は指輪を見せる。

「はて？ これはなにかね？」

「これが『開かずノ本』だ。」

「は？」

「と、いうかあの本の名前は『深淵の書』だった。僕が開けた。」

「本当かのー？」

「ああ、すんなりあいたぞ？」

「ふむ、それで？」

「僕に力をくれた、あと、指輪も」

「せうか……それでは、それは君にあげよつ……」

「ありがとうございます。ちなみに、力のことは誰にも言わないでくださいね。」

「うむ、分かつてある。」

そして、僕も部屋を出る。

「せういえば今日は舞踏会だつたな……」

舞踏会会場

僕はケティを探していた。

しかし、どこにもいない。どうしよう……はやく謝りたいのに……

・
あ、あそこにはいるのは、ケティの友達その1

「あ、あのケティどこにいるんですか？」

「つて、る、ルーラ様！あなたって、人は最低です……また、ケティを傷つけて！」

「ちよつー！それここで言わないでー！皆聞いてるからー。」

「別にいいですー！皆も聞いてくださいー。」

「つーで、やめろよー！僕はあるの時記憶が・・・」

「言い訳なんて見苦しいですー！」

「言い訳じゃない！僕の話を聞け！」「

この友達その1は僕の話を聞く気がないらしい・・・

「ちよつーもつー、いい！自分で探す！」

そういうって、僕は会場のテラスに向かって走る。

「つーで、ちよつと待つてくださいー！まだ話は終ってませんー。」

『あいつ、ケティと付き合つてるんじやなかつたっけ？』

『ひでえ、やつだな。たぶらかした後に傷つけるなんて

「ほら、言つただろー！あいつは卑怯なんだー。」

これはギーシュです。

僕はそんな言葉無視してテラスに走る。

そこには才人がいた。飲んでいた・・・

「おお、ルーラお前も飲むか？」

「今はそれどころじゃないんだーすまん！あと、あの友達を説得しないでくれないかー頼む！」

「まあ、いいけど。」

「ルーラ様待つてくださいー！」

「僕が記憶失つてたこと信じられないんだー本当に迷惑だ！」

「ちょっと、そこのケティの友達さんー止まって止まってー！」

「あなたに用はありませんー..どいてくださいー..そして、僕はそのテラスから身を投げる。」

「つて、る、ルーラ様こんなところから落ちたらー..」
と、言って友達その1がテラスから下を見ると、もつ僕はものすこ
い離れた場所に見えるはずだ。
今は、力の無駄遣い中である。

僕は急いで学園中を回つた。

それでも、見つからない..

そして、最後に行き着いたのは、おなじみに木陰..

そこに僕は座り込んだ..

さすがに僕は女子寮に入るわけにはいかない..

ハア・..・結局僕の初恋(?)はこうやつて終るのかな?
と落ち込んでいるときだつた

後ろで誰かが動いた・・・まさか、この前みたいにタバサか？
じゃなくて、僕はその人に言つてみた・・・期待はしていなかつた

「ケテイ？」

しかし、期待を裏切つて、その人物は

「ルーラ様・・・
ケテイだつた・・・
なんて言おう・・・

「あのそ・・・今朝の僕は・・・」

「分かつてます・・・記憶がなかつたのでしょうか？」

「そりなんだ・・・けど、それでも、謝りたい・・・ごめん」

「あれほど、私に謝らないでつて言つたのに・・・

「ごめん・・・」

つて、僕謝つてばつかだな・・・

そして、彼女は僕のほうに歩いてくる。
僕も彼女のほうに行こうと立ち上がり、歩き出す。

そして、彼女は僕に抱きつく。ずっと、なにかを望んでいたよう

・元

「う・・・グス・・・ルーラ様・・・ルーラ様・・・
僕はまた彼女を泣かしたのか・・・

「ケティ・・・」

そっと、彼女の髪を撫でる

「今回も慰めてください・・・いつもみたいに・・・
そういうて、僕の胸に顔を埋める。

「いいよ。僕はいつでも慰めよう。」

そういうて、彼女を抱いてあげる。

それは、初めてあつたあのときのよう。
変わったことといえば。今彼女が僕に慰めを求めていて、自分もま
た彼女を慰めようとしていること。

それから、10分くらいその状態でいた。
そして、僕は彼女に言つ。

「なあ、ケティ。今アクセサリーもつていいかい？」

「ええ、もつてますよ？付けましょうか？」

「いや、ここでじゃない。だから、行こつ

「え？どこで付けるんですか？」

「決まってるだろ？今から踊りに行くんだ！」

これが、今日の僕との決別の証。より多くの人に見てもらおう、今
日からの僕の証を。

「え、ええ！でも、お洋服とか用意してないし・・・」

「大丈夫だよ、僕もだから」
そう、僕はケティを探していただけで、踊る気はなかつたから制服だ。

そうして、僕はケティの手を引っ張り、彼女を連れて行く。
「る、ルーラ様自分で歩きます。手を放してください。」

「いやだよ、ケティ。僕はもう絶対この手を放さない。そう、誓つ
たんだ。」

我ながらくセイセリフである。

この『る、ケティにだけはいいセリフが言える。

「じゃ、じゃー、絶対に私のこと放さないでくださいね・・・？」

「ああ、誓うよ。ブリミルなんかじゃなくて、君に。」

それは、他の生徒に聞かれたら異端と言われるかもしけない・・・

「では、行きましょう。」

今は彼女が僕の手を引っ張る感じになつていて。

そして、5分くらいで会場に着く。
まだ、会場では皆が踊つていて。

僕とケティは、ケティに引っ張られる形で入場した。

『おー！ケティとルーラだぞ！』

『おお！ケティちゃんここで制裁を下すのかー…？』

『いいざまだ！』

「諸君！見ていたまえ！あのルーラが制裁を下される瞬間を…」
おお、ナイス宣伝だギーキュ！

才人がこっちを見ている。心配そうな目で。

友達その一人も申し訳なさそうな目でこっちを見て、目が合ったときは笑ってくれた。

まあ、大丈夫だらう・・・

「さあ、ケティ」

「はい、ルーラ様」

皆が、注目している。

ケティがアクセサリーを取り出し、僕に王冠のイヤリングと翼の髪飾りを渡す。

僕に付けるという意味だらう。けど、最初にケティが付けてくれた。

耳に掛かった髪をどかし、そつと、耳に触れ、それが心地よく、僕は少し動搖する。

そして、そこにイヤリングを付ける。剣のデザインのイヤリングが光の中輝く。

そして、僕の手を取り、きっとわざと、翼の指輪を薬指に嵌めた。

周りは少し勘違いしていたんだろう。

制裁なんかじゃない。その真逆、僕は祝福されているのだ。

僕は、ケティから受け取ったイヤリングと髪飾りを彼女に付ける。まず、髪飾りから。彼女の髪をそつと撫で、彼女は気持ちいいのか、目を細める。

そして、前付けていた場所に髪飾りを付ける。

そして、彼女がやつたように、耳に掛かった髪をどかし、耳に触れる。そして、彼女は赤くなる。

そして、そこにイヤリングを付ける。王冠のデザインが光の中で輝く。

その間、すべてが静まる、全員がこっちに注目している。

そして、僕は極め付けに。

「ケティ、好きだよ……これからも、よろしく。
と、告白しました……恥ずかしい！」

「わ、私も、ルーラ様のこと……大好きです……」

と、言つてこっちに唇を突き出す。くちづけを求めてくるのだろう。

そして、僕はそれを断る理由も気もない……

だから、僕は……彼女の唇と自分の唇を重ねた。

これで、一度目だった。でも、今回は全開と違つた感覚がした。なにかが、自分の中から消えていった。

それが、なんだつたのかは分からぬ……でも、それが、心地よかつた。

彼女の唇の温もりを感じながら、僕は願つた。

彼女を守れるように……彼女が傷つかないよう……

唇を放す・・・

そして、彼女の顔をのぞく込む。目が合つ。彼女の顔は頬が朱色に染まっていた。

彼女は恥ずかしがつていた。それくらい、表情を見なくとも分かつた、でも、確認したかった。

僕も恥ずかしかつたし、顔も赤いだろう・・・

けど、そんなこと関係ない・・・

「はい・・・」

と、言って僕は彼女の腰に手を回し踊る。

その場で踊っているのは僕たちだけだった。他の人はあっけをとられている人と、僕たちを見守っている。

そして、曲が終る。そして、彼女の手を取りテラスに去る。

そこに残つたのは、拍手の音だけだった。

「ケティ・・・踊ろうか?」

第9話～心からの帰還、トラブルの後の「人の仲はより深まるとかなんとか～

今回は、なんとか終りました。色々とすつ飛ばしています。次回は、外伝にしようかと・・・次でギー・シユと仲直りさせたい・・・ギー・シユは結構好きだつたりする。

第10話～騎士と姫の一日、友人を助ける～（前書き）

久しぶりの更新です。まだ、読んでくれている人がいるか知りおませんが、書きました。題名だとケティが出てくるような感じですけど、ぜんぜん出ません。どちらかというと、俺はルーラの話です。

第10話／騎士と姫の一日、友人を助ける／

あの舞踏会以来、僕とケティは学院公認恋人になつた・・・それは、いいことなのか悪いことなのか・・・まあ、ケティが嬉しければいいのだが・・・

そして、周りからの俺の評価も変わり始めた。

この前の騒ぎを『騎士と姫』の物語と、言うものと『狼とか弱い少女』と言うものに分かれ始め。

前者には俺の人気は上がつた。当然後者の人たちには人気が下がつたか平行線か・・・

主に、前者が1年、2年女生徒、3年で、後者が2年男子生徒だ。相変わらず、男子からの人気がない・・・少し困ってきたな・・・

第10話／騎士と姫の一日、友人を助ける／

今日は、昨日の舞踏会があつたため、代休になつている。

僕は昨日ケティにしたことを思い出しベッドの中で悶えでいる・・・恥ずかしい・・・かなり、非常に恥ずかしい・・・皆に顔が合わせられない・・・あんなきざな態度取つたし・・・

そんな時僕の部屋のドアにノックの音が響いた。

僕は、だるいながらもベッドから身体を落とし、のそのそとドアに向かつて歩く。

そして、ドアの近くで。

「どなたですか？」

と、尋ねてみたところ。

「も、モンモランシーよ。」

モンモランシーだと・・・なにかしたかな？
実はこの人とはまったく交流がない・・・

「はい」

と、言つてドアを開けると、なにかびっくりしてゐる。

「なにか？」

「寝癖がすごいわ・・・」

「お前だつて巻き毛のロールがすげえよ

「なにか言つた？」

「いえ、何も・・・」

いつもマリアにやつてもらつてゐんだつた・・・
休みは自分で時間かけてやるけど・・・

「ちょっと待つてて・・・」

と、言つて部屋に入つて5分、僕と寝癖の激しい戦いが始まった。

「はい、どうぞ」

と、寝癖を直すついでに着替えた。

「ありがとう」と、言つて彼女が僕の部屋に入る。

「でも、いいの? 僕の部屋なんて来て? ギーシュが怒つたり?」

「それなら、あなたもいいの? 私なんか部屋にあげて? ケティが悲しむんじゃない?」

「ははは。何を言つてるんだ? 僕がそんな事しないのは彼女も知ってるよ?」

「相思相愛つてわけね・・・」

「で、今日はなんの用かな? ミス・モンモランシー」

「あのね・・・」

そつ言つて、彼女がベッドに腰をかけ、俺は椅子に腰をかける。

「『』の『』、ギーシュが元気ないの・・・」

「あひやー・・・」

「『』あひやー』ってなに? 理由知つてるの?」

「逆に聞くけど、ミス・モンモランシーは知らないのか?」

「ええ・・・心当たりなら・・・」

「言つてみ

つか、分からぬいほづがおかしい・・・

「昨日私が彼のケーキ食べちゃった・・・

それは、ギーシュにとつてはいこことじやないかな?

「そんな事じやないよ・・・はあ、じや、説明するよ。」

と、説明をしようとした瞬間に『コイツ謀つたな』とこづタイミングで来ました。ケティです。

「ルーラ様おはようござります・・・つて、向でミス・モンモランシーが?」

「とこづか、向でルーラ様と朝食を取る予定なのです。」

「私は、じこでルーラってじこで食べてたのね。」

「わうこづ、ルーラってじこで食べてたのね。」

「わうだよ。いつもマリアが運んできてくれる。そろそろくると思ひます。」

ベッドの上にいるんですか?」

「あ・・・すみません。」

ケティ、怖いよ少し殺氣が出てらしじゃる・・・

「あ・・・ケティ?」

これは、俺も殺されるかも・・・

「今日町に行くって話しつづけ……来週でもいいかな……？」

「な、なんですか！？わ、私ずっと楽しみにしてたのに……まさか、ミス・モンモランシーと！？」
違う！その発想は間違つているぞ！

「な、なんで私がこんなやつと…？」

モンモランシーもひどい！

「こんな奴とは何ですか？ルーラ様以上の男性なんていません！」
ありがとケティ……

「まあ、その話は置いといて……まあ、これから友でも助けに行こうかな、と」

「友ですか？」

「ああ、なんだかこの頃ギー・シューが元気ないらしいんだ……で、まあ、主な原因は俺が打ち負かして、昨日のラブシーンだと思つんだよね……」

そう、主に昨日のラブシーンが……やつべ……顔熱い……

「昨日の……ですか？」

ケティまで顔を赤くしないでくれ、もつと恥ずかしくなるから……

「あら？私は一人ともお似合いだなあーって思つたけど？」

ありがと、モンモランシー……

「それは、君が女生徒だからだろう……男子生徒から見たら俺は親の仇みたいなもんなんだよ……特に『モテナイ組』にはね……」

「

「なにその『モテナイ組』って？自分が悪いんじゃないの？」

「まあ、男には男の事情があるんだよ……」

「わうなの……」

「ふうー、じゃー今からギーシュ復活の策立てるか……

「ええーと、じゃーギーシュ復活に案がある人お？」

「……」「……」「……」

「おこーお前ひやる気あるのか……

「二人ともないのね……」

「ないから相談にきたんだけど……」

「それも、そうだねモンモランシー……

「ギーシュ様なんてビーフでもここです……

まあ、そういうわざに……

「わうか……うーん、じゃー、何しよう……」

「なんとかしてよルーフ……」

自分で解決するという策はないのか？

「ああ、じゃー、とにかく話言つてへくるか……」

「こつてらうしゃこませ、私たちはこいでもつりこでますね。」

中庭、カフェ（？）

ギーシュはどうかな？

お、いたいた。一人で紅茶飲んでるな・・・まあ、朝早いし・・・
モンモランシーも、苦労だねこんな朝早くから
さあ、どうやって話しかけようか・・・

選択肢は3つだ！

? モンモランシーのことは伏せて説得
? モンモランシーのことを言つて説得
? まったく、違う方法で説得
うーん・・・一番好ましいのは? かな・・・
? は? が失敗したらで、? は思いつかないや・・・
よし、? で行つてみよつー

今は朝なおかげで人はぜんぜんいないし、好都合だ

「おはようギーシュ。一緒にいいかな？」

「いいと書つと思つてているのかい？」

「いや、ぜんぜん思つてないよ。」

「ふん。なら何処かへ言つたらどうだ? 愛しのミス・ロッタが待つ
てるんじゃないのか?」

お、言つてくれるな・・・けど、ここから切り込める

「まあ、待つてるだらうけど・・・君のほうはどうなんだい? ミス・

モンモランシーとお付き合っていふんじやないのか?」

「ナリだよ。」

「じゃー、なぜ君は『元』一人でいるんだい?」

「君に関係ないだろ!」

そう叫んでギーシュが杖を取り出す。

「ここで戦いたいのかい?」

「ふん。望むところだ。この前は油断したけど、今回は負けない!
そして、またしても・・・この一週間でお前は向回すればいいんだ
い?」

「いや、ちよつとまつ」

「諸君! 決闘だ!!」

「待てよ――――!」

血壓

「で・・・また決闘になつたんですか?」

「ああ・・・成り行きで・・・」

「まったく、解決してくれるんじゃなかつたのー!？」

ただいま、絶賛説教され中・・・

「いや、俺が断る前にあいつが大声で言いやがつて・・・」

「まあ、じゃー、ギーシュ様を倒した後に説得すればいいんですね」

「まあ、そつかな・・・手荒なまねは嫌なんだけどな・・・」

「はあ・・・あんたに頼むんじゃなかつたかしら・・・」

「まあ、ギーシュも今思春期なんだ。いろいろ盛つてるんだろ・・・」

「と、適当に結論付けて僕は一人を帰した。

またしてもヴェストリの広場

「よく、逃げずに来たな!」

なんだが、この前も聞いたような・・・

「いや、けど、お前前回も負けてるの?」

そこまで、僕はいじめる趣味はないぞ?

「前回の僕とは思わないほうがいいぞ!僕は生まれ変わったんだ!」

「マジか!」

「じゃー、その実力見せてみろ!」

「言われるまでもない！！

そうして、僕たちの決闘の狼煙が上がった。

僕はブレイドを唱えた杖を構える。

ギーシュは一体のワルキュー練金する。

「一体のいいのか？前回は6対で負けたのこ。」

ギーシュは答えない。

さすがに、ギーシュ相手に肉体強化は使わないつもりだ。

「行け！ワルキュー！」

ギーシュがワルキューに命令を下し、僕に突っ込ませてくる。僕もワルキューに突っ込みに行く。

「前回どなにも変わってないなギーシュ！」

「それはどうかな！」

そして、ギーシュは突っ込ませたワルキューを止め、後ろに引かせる。

僕は一瞬動揺して動きを止めてしまう。

「鍊金！」

ギーシュが再び鍊金を唱えると、僕の足元から手が伸びてくる。そして、僕の足首を掴む。

「なっ！」

どうやら、ギーシュは貴族のプライドを捨て、僕に勝ちに来たよう

だ。

この展開は予想しないなかつた！

「くつ」

「鍊金！」

そして、再びギーシュが鍊金をして、3体ワルキユーレを増やす。4方向からのはさみうちか。

「敵を討て！」

そして、4方向から突っ込んでくるワルキユーレ。全員が手に、剣、ランスその他凶器を持っている。

やばい！

そう思つた瞬間、僕は行動をしていた。体に痛みが走り、跳んでいた。

SIDEギーシュ

今回はルーラに勝ちに行つた。

貴族のプライドの前に僕のプライドが許さない！

まず、1体のワルキユーレで彼の注意をそらす。

次に、ワルキユーレを下がらせ地面から手を鍊金し彼の足首を掴む。そして、最後に3体新たにワルキユーレを鍊金し彼を4方向から挟み撃ちにかける。

我ながら完璧な計画だった。

はず・・・だつた・・・

ルーラは今僕の前にいない・・・
どこへ行つたか?

彼は今・・・空中にいる。

飛んでいる・・・人間にはありえない・・・

彼は一体なんなんだ?

SIDE OUT

SIDEタバサ

また、ギーシュとルーラが決闘をしているらしいと聞き、今私はキ
ュルケと見に来ている。

3階の窓から観戦していたのだ。

最初はどうせギーシュが負けると思っていた。
しかし、それは嘘となってしまった。

ルーラが油断していたのも大きいが、ギーシュにしてはなかなか
作戦だつたと思う。

でも・・・ルーラはそれを遙かに越えていた。

私たちのいる3階は地上12～15メイルだ。

今彼はそれを越えている。目測で25～30メイル程度だ・・・

人間が飛べる高さではない・・・

「ねえ・・・あれってなんなの・・・」

隣にいるキュルケを見ると彼女の目は、憧れでもなく、驚きでもなく、歓喜でもなく、そこには恐怖の色で染まっていた・・・

「さすがに、あれは人間じゃないわ・・・」

その通り、あれは人間業じやない・・・

彼を見ると、今落下中だ。

全員が全員呆気をとられている。

時間が凍っていた。何が起こっていたか分かつていいない。

私たちの前には、人間あらざる人間がいるのだ・・・

ルーラ・・・あなたは一体誰?

S H D E O U T

な、なんでだ!?
て、言うか痛い!!

「ぐつ!..」

やばい、このままじゃ体制を整えて着地できない!

だんだん地面が迫つてくる。

そして、地面と接触するはずだった瞬間・・・また、痛みが走った。

着地は成功した。と、同時に俺は体制を崩した。

「ぐああああ!..」

地面にのた打ち回る。

痛い痛い痛い痛い！

そして、思い出す。この痛みを。
この、妬み、悲しみを・・・

お前なのか？

“あはは そうだよ？僕が君を操ってるのを”

お前は誰・・・だ？

“僕の名前はシリアだよ 現在のこの指輪の最高権力者？”

前の・・・前のやつはどうした・・・？

“ああ、あのおじさん？君に本をあげたからってみんなに殺されちゃったよ？”

みんなとは・・・その本の中の住人のことか？

“それ以外ないでしょ？幾年もの負の感情がひとつ的世界を築くなんてすごいよね～”

・ なぜ・・・なぜ、僕の体を操った・・・この力は見せたくないんだ・

“だつてえ～ 君に死なれると困るんだよね～。次は僕が殺されちゃうかも？”

お前らの事情なんて知らない！

“ あるえ～？ そんなこと言つていいのかなあ？ 僕は君の体を操つて
るんだよ？ なんなら、あの『ケティ』とか言つ人。殺しちゃうよ？ ”

ふ・・・ぞ・・・・・・・

そして、僕の意識は途切れた・・・
何もしてないといいな・・・

SIDEギーシュ

ルーラが落下（？）してから、10秒ほど経過した。
彼は一向に起きる気配がない。

僕が何かやつたのだろうか？ いや、けど何もしていないし？

「 おい！ ルーラが動かないぞ？」

「 ギーシュが勝つたんじゃないか？」

この発言がその広場にいる人の火種になつた。

「 おお、ギーシュすげえ！」

「 ギーシュ様！ さすがです！」

僕のファンクラブも復活かな？

「 けど、何をしたんだ？」

「それが分からぬからす」いんだろ?」

と、そんな感じで、いろいろ言つてゐるのだが……

「だ、誰か!彼を保健室に運んでおいてくれ……
まずは、彼を連れて行かなれば……
さすがに、子供の決闘で殺すのはまずい……

「おお、勝つたのに、相手を氣遣うなんて!」

「人間できる!」

「ギーシュ様すてきい!
僕の株はうなぎのぼりだ!」

SIDE OUT

SIDEキュルケ

最初に思つたのは、興味、そして、次は感心、そして、最後は恐怖。

しかし、彼は今地面にひれ伏している。
あの、恐怖はうそだつたのだろうか?
いや、それはない……あの感覚は確かに『恐怖』だつたはずだ。
それなら、なぜそれを『えた彼が、あのギーシュに負けるとは思わ
ない……

なら、彼に何か?

あの、跳躍力になにか関係している?

そして、今感じているのは探究心。

彼のことが知りたい。

まあ、ダーリンほどではないけどね。

SIDE OUT

その世界は孤独・・・

その世界は寂しく・・・

その世界が悲しい・・・

僕はそんな世界にいる。

・・・よつこそ、僕たちの世界へ

そんな看板が立っている・・・これだけが、場違いだ・・・
いや、そう思うと自分もここに場違いではないのだろうか?
不思議と、ここが始めての感覚ではない・・・

僕は来たことがある?

僕はここを知っている?

ここは僕の居場所?

そう考えながら歩いていると、次の看板にたどり着いた。

・・・ そうだよ？ だつて、本が君を選んだんだから。

本が俺を選んだ？

俺は本に勝つたんじゃないのか？

・・・ 人の心に勝つなんて不可能だよ？ 人のもつとも強い力は妬み、憎しみ、怒り！ 負の感情だもの！

負の・・・ 感情・・・？

・・・ そう、負の感情！ 人を妬み！ 恨み！ 憎み！ 人は強くなるんだ！ 考えるだけで、ゾクゾクするでしょ？

妬み・・・ 恨み・・・ 憎む・・・

・・・ そう、その生きだよ！

けど・・・ 僕は・・・ もう・・・ やめたいんだ・・・ この世界をきれいに見たいんだ・・・

・・・ この世なんて全部汚いじゃない？ 人をだまして！ 利用して！ 切り捨てて！

力が欲しいんだろう！ それなら、人を憎むんだ！ この世界を呪え！
君が今までの人生どんな扱いを受けてきたんだ？

今まで・・・俺は・・・

そして、俺の意識が覚醒した。

「知らない天井だ・・・」
「ここは・・・どこだ?」

「起きたのかね?」
「誰だ?」

「ギーシュ・・・」

そこにいたのは以外にもギーシュであった。

「僕で悪かつたね・・・」
いや、誰にも期待してないから。

「で、何か用?」この様子だと決闘は僕の負けだし。謝るよ。

「いや、いい。君の様子を見に来ただけだ。」

「なにか、罰とかないの?」

「いいよ。君に勝ったおかげで株が上がった。

そうかよ・・・

「それじゃ、僕は帰らせてもらひうよ。」

「いいよ。君に勝ったおかげで株が上がった。

「ちょっと待て。」

まだ、言いたいことが！

・・・ズキン・・・

「くつー。」

頭が・・・ぐつー！

「どうしたんだね？」

「なんでも・・・ない・・・」

「いや、そんなことないだろ。明らかに頭を押さえてるじゃないか。待っている、今先生を呼んでくる。」

「いい・・・呼ぶな。お前に言いたいことがあるんだ・・・」

「僕に？」

「大切なもののつてのはな・・・失くして・・・初めて・・・その大切さが分かるんだよ・・・」

「だからさ・・・ギーシュ・・・君の大切なものはなにか良く考え
るんだ・・・」

そして、俺の意識はまた切れた。

起きたときに、ケティがものすごく心配していく（自分では泣いて
いないといつていたが）大変だった。

そして、モンモランシーには感謝された・・・ケティ経由で。

これで、俺の役目は終わりかな・・・？

第10話～騎士と姫の一日、友人を助ける～

（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

第1-1話～温もり～（前書き）

なんか、前投稿がすこい昔だ。気まぐれで更新しています。作品が
多数ありますが、どれを更新するかもきっと気まぐれになってしま
います。こんな気まぐれな作者ですが。よろしくお願いします。

第11話「温もり」

ギーシュとの決闘（？）以来僕の中に住み着いた存在は害はなかつた時々、話しかけてくるくらいでなにをするでもなく、しかし、僕の心になにかを残していった
虚しさ、悲しさ、切なさ・・・・
きっと、彼女はあの感情たちの一つ・・・・まだ夢の中で苦しんでいるんだろう

第11話「温もり」

僕とはなんだ？

僕とはルーラ？それともラーケ？はたまたミドルのルイ？
いや、どれも僕ではない・・・・それと同時に僕は全部だ
ルーラな僕、ラーケな僕、ルイな僕

さうとすべてが僕なんだろ？

しかし、才人はどうだらう？
彼はいまどこにいるだらうか？

今、床にいる・・・・・。
変か？しかし、床、ないしは地面にはいつくばつてこるところの状態
だ・・・・・。

「これはなんだらうか、フェルノ？」

今は授業に行く途中だ

「ニヤあ～？」

さあ？と言つよつに首をかしげる猫は僕の使い魔の猫

「僕には人間を地面に虜げる独裁者のイメージしか沸いてこないよ・
・・・・・なあ、ルイズ？」

「なによ？文句あるの？」

「あるとも・・・・・そもそも人間は地面にいるものじゃない。

少なくとも4本足で歩かないな

次に・・・・・才人がかわいそうじゃないか?」

「そうだ!かわいそうだ!」

「『わん』でしょ!」

「わん!」

これは、ひどい・・・・・

「ルーラ様?と・・・・・才人さん?ルイズさん何をやつている
んですか?」

そこに登場する僕の最愛のケティ

まだ、あれから買い物に行つていないので少し最近『機嫌斜めだ

「見て分からないの?『SUMプレイ』よつて違う!ルーラ台詞かぶ
せないで!もう、勘違こられるでしょ!」

声をかぶせてみた

まあ、ありのままを言つてみただけだけだけね

「でも、ルイズさん…………勘違いされてもおかしくない状況ですよ？」

「自分の使い魔（人間）を地面に這いつぶさせてそれを鞭打ちやら、首輪をつけるなんて。もうあっちの趣味しか連想されないぞ？」「そんな事を言つて、ケティの手を取りその場を早々と離脱する田立ちたくないしな

「ルーラ様、手はつながなくともはぐれませんよ？」

「あ、ああ。そうだったね…………いや、ビリしても手が伸びちゃうんだ。」

苦し紛れに言い訳をするが、おれが案外彼女にきいたようだ

「もひ・・・・・・」

少し、頬を膨らましじつちを見る彼女は愛くるしいかぎりである

「ルーラ様・・・・・・」

「何？」

「授業はもう抜け出さないでくださいね？」
「授業はもう抜け出さないでくださいね？」
突拍子の無い事を言つのであった

「え？ なんで？ 僕聞いてても意味ないし。」
一日の授業の半分くらいは抜け出している
それでも、成績は中くらいを保っているので大丈夫だらうと考えて
いたのだが

「聞いていればもつといい成績が取れます！ そうすれば、周りから
舐められるようなことはありません」

「ええ？ でも、僕舐められてもいいよ？ ケティは僕のこと分かってくれてるし。才人だつて、マリアだつて分かってくれてる。」

「それでもです・・・私はルーラ様が見下されるのが嫌なんです。本当は周りの人達よりぜんぜんできるのに・・・」
おいおい、そんな悲しい顔で言われたらやるつきゃないじやないか？
それに、僕せんせんできないよ？ きつと・・・比べた事無い

「ああ・・・分かつたよ・・・ちやんと出るから。
そんな悲しい顔しないでくれ」

「ほ、本当ですか！？」
いきなり明るい顔になる彼女もなにかハムスターか何かを連想させるものだ

「ああ、約束しよつ

「じゃあ、猫さんもひゃんと見てくださいね？」

「いやあー

フェルノが買われたようだ・・・・
まあ、ケティの頼みだし、断れないか

「おひほん。今日の授業はすべて中止です」

あらまー、僕が授業に出る気が出てきた突端これだよ。
まこつちやうよなー・・・・・

なんでも今日はお姫様が来てくれるようだ。

というか、それですべて授業中止となると本当に気楽な学校だと思
えてきた。

その知らせを聞いた直後僕は教室から退出しそうとしたが、そこに
不意にタバサが話しかけてきた。

「えらい。」

「部屋に。お姫様とか興味ない」

素つ氣無く質問されたので素つ氣無く返した。

「そう」

彼女も納得したのか僕の隣で歩き始めた。

「で、キミは？」

興味本位で聞いてみたが、大体分かる。

「私も部屋に戻る」

分かっていたよ。彼女ならやりかねないとね。

「そうですか」

あきれた。これでは、まるで共犯者みたいじゃないか。

二人で寮が別れるまで歩き別れる。
別れの挨拶くらいしかしなかったけど。

「ただいま」

誰もいないはずの部屋に入る。

一応は挨拶をするのが礼儀だと思つ。

「おかえりなさいませ」

しかし、予想に反してそこにはマリアがいた。

「あれ？ マリア今日は実家に戻つてゐるはずじゃないのか？」

そう、マリアには今日休みをとえて実家に帰ると言つっていたのだ。

「それが、王女殿下が学園に参るとのことで行けなくなつてしまつました。」

はあ、もう全部が王女王女。

そこまで重要な人物なのだろうか？ 見たことないから知らないけど。

「そうか。僕これからサボるから、何か食べようか？」

「あれ？ 王女様が参られるはずですが？」

そりや、普通は王女のところに行くだろうな。

「フルノに行かせよ。そうすれば、主人の僕も見ていること

なるだろ？」

そういうつて、フェルノに話しかける。

「行つてもらつて良いかなフェルノ？」

撫でながら言えば大抵の事は了承してくれる。

そのあたりは普通の猫なのかもしれない。

「にやー」「

了承してくれたらしい。

「よし、じゃ僕は厨房から何か食べ物を貰つてくれるよ。」

「いえ、私が持つてきますよ

マリアが自分でやろうとするが。僕はそれを止める。

「いいよ、マリアは此処で待つてくれ。今日も十分働いただろ？」
そつと、厨房への道を歩き始めた。

厨房に入るといつも通りの食の匂いが充満していた。
使用人たちが今日の晚餐のために色々用意をしているようだ。

「すみません」

一人の使用人に話しかける。

「は、はい！ 何でございましょうか貴族様！」

行き成り、怖がり始めたのだ。

そう、これが普通。貴族とは平民を虜げる存在。貴族は平民に怖がられる。自分の領でもそつだ。どこに行つたつてそつだ。

「少し食事をもらえないだらうか？」

そう、優しく話しかける。

そうすると僕がそこまでひどい人じやないと分かると。

「はい、今すぐ」

そう言つて、厨房の奥に消えていった。

少し経つと、料理長のマルトーがやつてきた。

「貴族の坊ちゃん」れどよろしくでしようか？」

そうして、トレイで料理を運んできてくれる。

「ああ、それで十分だ」

運ばれてきたのは簡単な昼だ。

「それにしても、貴族の坊ちゃん。話では今から王女が参るらしいですよ？」

僕のことを気にしてくれているんだろう。

「お気遣いありがとうございます料理長マルター。でも、僕は王女なんて興味ないんだ」

そう、きっぱり言つてトレイを貰い部屋に戻ることにした。

道中校門のほうに集まつていく生徒達が多数見えたが、きっと王女様を見に行つたんだろう。

見ていて、なにが楽しいのか・・・・

「マリア、お待たせ
部屋に入る。

「はあ、本当に持つてくるとは
あきれられた。

たぶん、道中、友達か教師に捕まつて王女を見に行つたと思ったのだろう。

しかし、今日の僕は運が良いのか誰にも会つていない。

「さあ、食べようよ

そつとして、マリアと一緒にごはんを食べるのは久しぶりだね？」

「ひつやつてマリアと一緒にごはんを食べるのは久しぶりだね？」

そう、マリアは食事を運んでくれるが一緒に食べる事は稀なのだ。

「そうですね。」

素っ気無く答えられる。

基本的にマリアは静かな女性だ。まあ、だから専属にしたのだが。

「懐かしいな、昔はずっとマリアと一緒にいたのにね」

「そう、昔は領地で楽しく毎日を過ごしました。」

「魔法なんて知らなくても子供でいられた。」

「魔法なんてなければ僕は人を恨まずにすんだ。」

「ルーラ様……」

「そんな僕が心配になつたのかマリアも不安になつてきたみたいだ。」

「魔法なんてなければ……なんて普通言わないよな」

「魔法が使えないものは平民。」

「平民は貴族に虐げられる。」

「そんな生活は嫌だ、と思つ反面、腐つた貴族の仲間であることも嫌だった。」

「はい、ルーラ様は普通ではありません」

「小さく微笑みながらマリアは僕に言った。」

普通じやないからついてきた。

普通じやないからお世話がしたくなつた。
まるで、やう言つてこゐようだつた。

食事が終わつた後、僕は眠りについた。
久しふりにベッドで毎寝をする。

夢を見た。

僕が居た、シリ亞が居た。

どこまでも赤い空間。

どこまでも続いていそつて、でも田の前で終わりが見えてしまつそ
うな、脆い空間。

そこに椅子が2つとテーブルが並んでいる。
一つに僕が座り、もう一つにシリ亞が座る。

「やあ、ルーラ来たんだね？」

「いや、別に来た覚えはないが

「そうだったね、此処はキリの中だもんネ

「やうだよ?」
「やうばつ、此処つて僕の夢の中なのかい?」

「やうだよ?」
「やうばつ、僕に会えるし、僕はキリに会える

「僕に会つて何がしたいんだ？」

「別にー？ただ、お話をしたいだけだよ？」

「そうか。何を話す？」

「モーだなー、キミの育ちとか聞いてみたいな？」

最後は別に疑問系じゃなくて良いんじゃないか？
と思ったがそこは気にしないでおこう。

それから自分の過去について話し始めた。

僕の家はそこまで裕福な貴族ではなかつた。

贅沢すれば破産は見え見えだった。それでも、親は見栄を張つて色々買つた。

そして、貧乏になる家庭、税金に苦しむ農民。
そこに、不出来の息子が登場した。

親は失望した。自分の息子が魔法を使えないなんて。
そり、まるで平民ではないか そう思つていた。

よくない政治、溜まるストレス、そして出来の悪い息子。

その3つが重なり、僕にとつて地獄の日々の始まりだった。

毎日の用に行われる虐待。食事は自分で用意する。

日に日に癌が増えていく。使用人も減つていく。

その中、マリアだけが僕の味方だった。

いつもでも、僕の傍にいてくれた。僕が傷ついたときは慰めてくれた。

時々、母親代わりに一緒に寝て貰うこともあった。

そして数年のときが流れた。

途中からもう虐待する事に飽きたのか、それは止まった。

それでも、親は僕の顔を見る事はなかった。

親の寝室の前を通れば「生まれてこなければよかつた」などの声が聞こえる事もあった。

それでも、僕は生きていた。目的もなく。ただただ毎日を生きていく。

このただ生きていく日々になんの意味を見つける事も出来ず。

運が向いたのか、領地の経営が上手くいき、家は裕福になった。親も機嫌をなおし、僕のことを構うようになつた。

しかし、僕から親を突き放したのだ。もう、お前等なんか信用できないと。

もう、すでに溝は深すぎたのだ。その埋める事のできない溝は、もう一生両者をつなげる事を拒んだ。

何年も親とは顔も合わせていない。

合わせる顔がない。もう、許してもいいんじゃないか?と思つて反而、嫌だめだと思う自分がいる。

親の温もりを知らない、知る事のできなかつた僕は結局許せなかつた。そして、そのままこの学園にきた。

学園にきたつて何か言い事があるわけじゃない。

魔法の使えない劣等性。何をやってもダメ。平民のよつな貴族。罵倒され、虐げられた。それでも、屈しない。屈しちゃいけないんだ。自分はまだ生きる。それだけが望みだった。

僕が僕のために、僕は屈しちゃいけない。その瞬間僕は僕でなくなってしまうから。

思つてみれば、僕の人生は短い。
まだ16年しか生きていないので。

でも、あまりに語る事がない。

幼少時代を寂しく過ごした僕は精神がどこか欠落してるのかもしない。
でも、誰もそんなことわからないのだ。

「へえー、これがキミなんだ?」

「ああ、これが僕だ。僕と言う人間が歩んできた道」

「ふーん・・・・・・」

つまらなさそうに言づシロア。

「なんだ?期待なんてしていかつただろ?」

「まあ、やつだけじゃー。分かるよ、キリの気持ち」

「そーか・・・・・・・・」
分かる・・・・そつ言つてくれた。

こいつは感情の塊だつたな。分からぬ事はないのかもしねー。

「じゃあさ、僕はなにがほしいんだうつな?」

ためしに聞いてみた。

僕の生きる目的、意味を。

「そーだねー・・・・・」

少し考えるシリア。

その顔をうかがう事は出来ないがきっと、真剣に考えててくれている
だろう。

「せつと・・・ルーラは温もりが欲しいんじやない?」

そつ言つて立ち上がる。

僕に一步一歩近づいてくる。

「温もり・・・・・・・・か

自分の手を見る。

別に冷たいわけじゃない。

でも、特別温かいわけでもない。

「温もりって何だ？」

瞬間、甘い匂いがする。

女性特有の匂いだ。そして、ここには人は一人だけ。僕とシリアだ。シリアが僕を後ろから抱きしめている。時間が止まる感覚がする。心臓の鼓動が早くなる。

懐かしさが溢れる。目に涙が滲む。訳も分からず涙が落ちる。

「これが温もりだよ？」

そう言って彼女は一層強く抱きしめてくれる。僕はその腕を掴むことしか出来なかつた。

それから時間が経つ。体感で10分くらいだらう。その間ずっと抱きしめてもらつていたとすると少し恥ずかしくなる。

しかし、どこか安心する。彼女は僕のことを分かつていてくれる。

「もう時間だね」

そう言って、彼女は僕を開放する。

その瞬間一気に意識が覚醒する。

自分がいるのはベッドの上。足音がするのマリアだらう。きっと部屋の片付けてもしているんだ。

顔の近くに感じる温かさはきっとフルノだ。役目から帰ってきたんだな。

身体を起こす。

周りを見る。そこには椅子とテーブルがある。似ている。今さっきまでの光景を見ているようだ。

窓の外を見るともう薄暗くなっている夜に近づいているようだ。
僕は椅子に座りマリアに話しかける。

「なあ、マリア。一つ頼んで良い?」

小声で頼みごとをするのもいつ振りだろうか。

「なんでしょうか?」

マリアが近づいてくる。

自分の後ろに立たせその腕を掴む。

そして、その腕を勝手に首の周りに回す。

「あの?ルーラ様?」

今さっきまでしていたのだ。

こうやつて温もりを確かめたのだ。

夢のなかにあって、現実にないはずがない。
確かめたい。そして、感じたいんだ。

「温かいよ、マリアは」

そこには確かにあった。

懐かしさを満たす。あの、温かさが。

その体制を数分続け、やめる。

少し、夢に浸りすぎたのだろう。気付いてみると恥ずかしい事をしてしまった。

顔に熱があるのが分かる。

「『』、『』めん」

少し俯きながら謝る。

「いえ、いつでもいいですよ」

優しく微笑んでくれる彼女は、昔と変わらなかつた。いつまでもマリアはマリアでいてくれる。

そんな、彼女に僕は昔も今も未来も救われるのだろう。

「今までありがとうございましたマリア。これからもよろしくね」

改めて、言ひと割と恥ずかしい。

恥ずかしさの連発である。

「はい。どこまでも着いていきます」

僕の前に跪く。そして僕もかがみ、目線を合わせる。

そして今度は僕から首に手を回した。

『』主人ー、今日見たお姫様がいるー
フェルノが話しかけてきたので、マリアを放す。

少し頬が紅潮している。

そして、フェルノがいる窓際に近づき窓の外を見ると、そこにはフ

ードを深く被りそそくさと女子寮に入つていく人影が見えた。

「あれが？本当に？」
半信半疑だった。だって、一国のお姫様がこんな時間に女子寮に行
くはずがないのだ。

『うん、本当に』

自信満々だったので、それを試す事にした。

とこつことで、ギーシュのところこむつってきた。

「なあ、ギーシュ。今女子寮に姫様が入つていったのを見たんだ」
そう一言声をかけただけで彼は風の如く部屋から消えていた。
本当に、女性癖が悪い。

僕はまた部屋に戻り、眠りにつくこととした。
今日得た温もりを忘ることなく。

約束の初日から約束を破つてしまつた。と思つたが、授業ではなかつたし。

と、考えながらケティのことを考えて寝たのは彼しか知らないのであつた。

第1-1話～温もり～（後書き）

感想、指摘、誤字、脱字…なんでも受け付けます！

今思つたけど、マリアの容姿とか、シリアの容姿とか説明入つてしませんでした。

一応考えていた設定。

マリアは銀髪で瞳は青で、身長はルーラと同じくらい。おとなしい静かな人です。

シリア、白髪で肌は焼けている。身長はルーラより頭半分くらい小さいくらい。

第1-2話～頼ってくれ～（前書き）

なんか勢いでやってしまった。またが、一日2回更新するとは思つていませんでした。

第1-2話「頼つてくれ」

姫様が来たその翌日の朝の事だった。

なにか改まってサイトが僕の部屋にやつってきたのだ。

何事かと思い聞いてみると、いきなり彼の世界で最高の頼み方『土下座』で一緒にきて欲しいと頼まれたのだ。

いや？なににとか思ったのは内緒だ。

第1-2話「頼つてくれ」

なんでも、姫様の命令でアルビオンに行かないといけないらしい。
それは、災難だと言つてあげると、どうやら僕についてきて欲しいらしい。

「ああ、いいよ。他ならぬ才人のお願ひだからね」

「そう、才人は僕の友達だ。」

「だから、僕は彼の頼みを聞こう。」

「一度得たものは大切にする。それが僕の性分だ。」

「それは助かる！ それじゃ、今すぐ校門に来てくれー！」

「そう言つて、また飛び出していく。」

「今すぐつて・・・流石に用意とかが少しはあるんだけど。」

寝巻きから制服に着替える。

杖をベルトにさし、刀を鞘に納め腰に巻く。
少し、髪を整える。そして、最後に挨拶。

「じゃあ、そういうことだから、行つてきますマリア

「はい、言つてらっしゃいまセルーラ様」

ペコリとお辞儀するマリア。

そして、僕の後を追いかけるフェルノ。

所変わつて校門。

「もう！何やつてんのよバカ犬！ルーラなんてどうでもいいのよ…」
才人はルイズに説教されている真つ最中だつた。

「でも、ルーラつて強いしぞ、頭も結構切れるし…」

僕のことをそんな風に思つていてくれたのか、なんか嬉しいな。

「んなわけないでしょ！あいつはなんて私に比べればぜんぜんよこのバカ犬！」

まったく、僕のことをどう言おつがいいが、僕の友達しかも自分の使い魔をあそこまで罵倒するのは少しいただけないな。

「ルイズ、そろそろ才人のことを人間として扱つたらどうだ？そして、才人はキミのことを守りたくて僕を呼んだんだよ」

嘘かもしれないが、ある意味本当だろう。

人数がいればいるほど狙われる可能性は減る。

最悪の場合盾として使える。人数が多くて悪い事はそこまでない。港町まで一緒に行くくらいは価値はあるだろう。

「ふん！いいのよーそれにこれは私の使い魔よ！私がどう扱おうといいじゃない！」

後半の部分はスルーらしい……

「まあ、どうとでも……」

もう、呆れるしかないという感じだ。

「やあ、君も来る事にしたんだねルーラ」

「なんだギーシュも行くのか」

ギーシュはいつも用にバラを口に咥えながら喋つてくれる。いつも思うが、どうやって話してるんだ？

「ああ、君は言つたとおりあれはお姫様でね、その秘密任務と言つわけさ」

秘密任務ねー。

「と、いうより。そちらの貴族様は誰でしょつか？」

一応大人だし敬語を使つ。これも礼儀。

「ああ、僕はワルド。ルイズの婚約者だ。」

ワルド、といふとあの『閃光のワルド』だろうか。

「ああ、僕は閃光のワルドと言つたほうが分かりやすいかもしけないね」

やつぱりそうらしい。なんでも風のスクエアで強い・・・らしい。

「そうですか。お会いできて光栄です。僕の名前は「ああー・もひー
いでしょ！行きましょ！」って、おいおい「
人の自己紹介を途中で切るってどうなの？人として。
いのだ。

ワルドには苦笑いする事しかできなかつた。
まあ、どうでもいいことだ。有名な貴族なんて関わることなんてな
いのだ。

それから僕、才人とギーシュは馬に乗り、ワルドとルイズは仲良く
グリフォンに乗つた。

当然と言つべきかグリフォンのほうが馬より早い。
少しずつ開いていた差が重なり、グリフォンが5サントくらいに見
えるまで離れてしまつたようだ。

「なあ、ギーシュ」

「なんだいルーラ」

きつとみんな同じ思いだろう。

「これって、ひどいよな」

元々、馬について来いといつまつがおかしいだらう。

「しかし、しかたないよ。僕たちでは逆らうことも出来ないよ」とほほ、背景に出てきそうな雰囲気を醸しだしている。

それからギーシュとずつと色々話した。

主に、ギーシュの恋愛感について話した。

しかし、その間ずっと才人は俯き黙つたままだつた。

「なあ、才人。 そう落ち込むなつて。 ルイズだつていつかお前の事認めてくれるよ」

そう言って、慰める事しか僕には出来なかつた。

「そう・・・だといいよな」

それでも、まだ納得できな「よつ」な顔でやつと前を向いた。

そんな矢先に山賊の襲撃である。

空からは矢が降り注いだ。

「危ない才人！」

僕は急いで刀を抜き才人と矢の間にに入る。

「ギーシュ早くゴーレムを！」

ギーシュにゴーレム一体注文する。

その間僕は矢を切り落とす。

身体に魔力をめぐらせるイメージで。

目と腕に魔力を集める。

すべての矢を目で捉え、すべての矢を切ることができれば。
ほぼすべての矢を打ち落とす。

自分でも思うがこれって人間業じゃないよな？

「ワルキューレ！」

そして、ギーシュが作ってくれたゴーレムの後ろに隠れる。

「あ、ありがとうルーラ。でも、お前どうやって・・・？」
疑問に思うだろう。でも、教える事はできない。

「まあ、なんだ。才人、男には秘密があつたほうがいいだろ」
そう言って、ごまかす。

「そうだね！ その通りだよルーラ！ 君もようやく分かってくれたか
い！」

すくなく賛同してくれるギーシュ。ただの言い訳だけだ。

「あら？ でも私はあまり隠し事は好きじゃないわよ？」

第3者の会話への介入によつて自分達の危機が去つた事を知つた僕
たちはワルキューレの後ろから出てきた。

そこに現れた人物はなんとキュルケであった。

その後ろにいるタバサを見る限り此処まではタバサの使い魔のシルフィードで来たのだろう。

「まあ、人の好みは人それぞれってことだな、ギーシュ」
なんだか、すごく安心してしまった。

「まあ、そう言つてしまつたら終わりじゃないかな?」「ギーシュも安心したのかもうすでに口にはバラがある。

「ありがとう一人とも。助かっただよ」
先にこれを言うべきなんだが。

「誤解しないでね?私が助けたのはダーリンよ!」
そして、才人に抱きつくキュルケ。

ダーリンって才人のことか。
最近才人はモテ期に入つたらしい。

「ちい、才人お!!君つてやつはあ!!」
本気で悔しがつてギーシュを見るのは面白い。

「ありがとな、タバサ」

一応タバサにもう一度お礼をする。

「この貸しはちやんと返すからさ。何か手伝いことがあるたら書つてくれ」

一応言つてみたが、どうせ断られるだろ。」

「じゃあ、帰つたら魔法の訓練」

彼女は短くそう答えたが僕にはそれが意外過ぎてそこで数秒固まつてしまつた。

「どうしたんだいルーラ？」

ギーシュにそう聞かれた事すらも忘れていたのだ。

そうしてやつてきましたラ・ロシール。

港町と言つわりになぜか山の中にあることを不思議がつている才人に説明してやつた。

「アルビオンって言つのは空中に浮いている大陸なんだ。だから此

処から空飛ぶ船で行くんだよ。」

それに感動したのか才人はずっと「行きたい行きたい、早く行きた

い」で会話が成り立たなくなってしまった。

そうしてやつてきたのは宿だった。

どうやら明後日まで船が出港しないらしい。

まあ、そりやしじうがないよな。

「じゃあ、部屋割りしましょ。私とタバサは相部屋。才人とギーシュが相部屋。そして残念だけルーラは一人部屋ね」別に残念じゃないけどありがとうキユルケ。彼女の中では別に僕は「孤独の男」とかの像ではないらしい。安心安心。

「僕とルイズが相部屋だね」

そんなことをすました顔で言うワルドにイラついた顔を見せる才人。しかし、そこはやめておけと僕が目で教えてあげる。流石にギーシュとも決闘は子供のおふざけレベルで始末できるが、ワルドなどの有名な貴族となつてくると話が別なのだ。

そして、夕飯を食べ部屋に行くのであった。
夕飯は、貴族の豪勢な食事に匹敵するものでなかつたがとても美味であつた。

タバサがハシバミ草を食べているのをみんなで眺めていたのがメインイベントだつたな。

良くあそこまで食べれる。どこに行つているんだあの体積。身体の体積を越えてるんだが。

その夜僕はベッドに寝そべっていた。

この旅について、そしてなによりも才人について。

最近の才人の扱いはひどい。犬と呼ばれ首輪をされ、そして今度はワルドが現れる。

同情せざる終えないだろう。あれでも才人はルイズの事が好きなのだから。

見ていれば分かる。才人のルイズを見る視線は熱い。

そんな事を悶々と考えているとき部屋のドアにノックの音が転がってきた。

「はい」

そうやつて、ドアを開けると、僕の田線の少ししたに青い髪の少女、タバサが居た。

「どうしたの？」

別に、会う予定もないかつたし、万が一夜這いだとしたらもうひとつそりくるだろう。

「魔法の訓練」

え？ それって学園に帰つてからじや。

「気が変わった」

まるで、心を読まれたかのような感覚だったが、まあ予想ができる展開だったのだろう。

そして、宿から少し離れた空き地で僕たちは杖を持って立っていた。
そこには僕の使い魔のフェルノもタバサのシルフィードもいる。

「あなたみたいに動きたい」

簡潔に言われた要求だったが、それは無理だ。

「無理だ」

僕も簡潔に言つてやつた。

「なぜ？」

「あれは魔法じゃない。呪いだ」
まあ、詳しく述べると呪いではない。しかしここで正直にアイテムと言つてしまつと指輪を欲してしまつかもしれない。

「そう・・・」

少ししょんぼりしたタバサを見た。

ここに来て始めて彼女の感情らしいものを見た。

「タバサ、君はなんでここまで強くなるんだい？」

「言えない」

ぱつたり切り捨てられた気分だ。

「やつが」

でも、そこまで聞くわけにはいかないのだ。深入りしすぎて戻れないくなるのはいやだ。

「じゃあ、組み手をしてみないか?」

組み手は分かりやすい。ゆっくりやつても成果がでる。

「わかった」

そうして、僕たちは組み手を始めた。

こつすれば、こつ。

こつちにくれば、こつち。

そんな風に一つずつ動きを教えていった。

動きが早く出来ないのなら動きを最適化でもするべきだ。

そして、相手の手が読めればなおよし。そうすれば、いくら相手が早からうと攻撃は防げる。

そうして、一通り終わるとタバサは感謝してくれた。
そうして、また別れて部屋に戻るのであつた。

「フェルノ知つてゐるか? 青髪つて言つるのはガリア王家の証なんだよ
前、文献で読んだ。

『やうなのー? ジゃあ、タバサはガリア王家?』

「そりなんだろ？ まあ、何か事情があるんだろう？」
そう、人には事情がある。人に話せないようなものもある。それは仕方ないことだ。

それを知りたいのなら、相手が話してくれるまで待つだけだ。

そして、その日僕はその事情を10通りくらい考えて寝た。

次の朝、キュルケに会ったときやけにニヤニヤしてたのは田の錯覚だろう。

「あれ？ 才人は？」

才人がいないと気付いたのは朝食を取り終えたときだつた。
そういえば、ワルドもいないし、ルイズもいない。

「さあ？ 不貞寝でもしてるんじゃない？」

冗談を言つ風にキュルケが言つ。

「でも、部屋を出るのは見たぞ」
その可能性を削除するギーク。

「お髭男爵と決闘」

タバサがぼそりと言つた。

「あはははーー！」

「そんな失礼・・・ふふ

「お髭男爵つて」

そして、みんなで笑つた。

「つて決闘！」

そして氣付いた。

「勝てないよ才人じや。助けに行かないと」

そう、流石に才人が速いからといって相手が悪い。

「フェルノ頼む」

フェルノ実は鼻もきくのだ。

そして、辿り着いたのは決闘が始まつた瞬間だつた。

「デル・イル・ソル・ラ・ウインド・・・・・」
ワルドが詠唱している。あの詠唱はエア・ハンマーだ！

くつ、間に合え！

杖を取りブレイドを唱える。足に魔力を集める。そして爆散させる。まるで一瞬消えたかのようなスピードで才人の横に現れる。それと同時に杖を振りぬく。

切り裂かれた空間にあつた圧縮された空気は雲散し、才人に届く事はなかつた。

「「「「なつ」」」」

全員が驚愕する。

彼は普通のメイジであつて、才人のようにルーンがあるわけでも、ワルドのように王宮に仕える部隊の隊長でもない。

その彼が、才人以上のスピードで動いたのだ。そしてワルドの魔法を焼き消した。

「弱いもの苛めみつともないですよ？ワルド隊長」

「なんなら僕が相手をしましょつか？ただの憂さ晴らしならかまいませんよね？」

そう、これは憂さ晴らしではない。才人でないといけないのだ。

「い、いや。もういいだろう。すまなかつたね使い魔君」

そして、ルイズをつれてそそくせと出て行く。

「す、すごいじゃないカルーラ」
まさか、自分がこんなやつを相手にしていたなど到底思つていなか
つたギー・シユ。

キュルケとタバサは驚いて声がでないようだ。

そして才人は完全にアウトだ。

まるで、反応していない。なにが起こったかわかつていないうようだ。

「ほら、立てよ才人。剣の相手なら僕がする。そうしていつか越え
てやる「うじやないか？」

そう言って、手を差し出す。若干涙目才人は僕の手を掴み立ち上
がる。

そして、腕で涙を拭い、笑顔を取り戻した。

そのときの才人の顔は言い笑顔だった。

第1-2話「頼ってくれ」（後書き）

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

何か指輪でいい能力の提案があつたら感想にください！

今回は少し短めだと思います。

第13話～存在を辿つて～

ワルドは逃げていった後僕たちはみんなでお茶をした。そこらへんのカフェで飲み物を買い、みんなで喋った。悪口もあつたが、全部笑えた。

そんな楽しい日常に反して僕たちに迫つてくる危機があった。この作戦、なにかが裏にあると感じていた。

第13話～存在を辿つて～

時は過ぎ、今は夜。

僕は今、昨日と同じ空き地にいる。

今日は別にタバサと訓練があるわけじゃない。

ここで、僕の限界を試したいのだ。

指輪に話しかける。

「なあ、シリア」

その指輪の人物。

「なあ、こ？」

頭の中に直接話しかけてくるこの声にも慣れてきた。
日常でもシリアは色々なことに興味を持つ。それはまるで始めて世界を見る子供の用に。

「俺つてもつと速く動けるのか？」

そう、自分の限界とはスピードの事だ。

今日のワルドの事で自分がある程度のスピードで動いている事が分かった。

そして、人生生きていれば上はまだまだある。

「うん、もつと速くなるよ～」

「どうやって？」

期待が膨れてきた。しかし、この後裏切られるのであった。

「もつと魔力を集めればいいんだよー。」

そんな事は分かっているのだ。

でも、元々魔力を集めるのにはそれなりの時間が掛かる。

その前に自分の魔力には限界がある。

「はあ・・・・・」

少し期待はずれの答えを聞き落ち込むが、すぐに素振りを始める。

『主人一、なんだか宿のほうがうつるさいよー』
フェルノが教えてくれる情報はいつも正確だ。

「なにが起こつてる?」

『んー、鎧の音、あと火
つて、事は襲撃! 速く向かわないと。』

「フェルノ捕まつて!」

フェルノが肩に乗ったのを確認し、魔力を身体に巡らせる。
少しの間速く移動したい場合、瞬間にスピードを上げるより、身体能力を底上げして走つたほうが効率が言い事はすでに調べた。
その状態で走れば、消えるまでとはいが常人の2倍から3倍は速く移動できるだろう。

宿の近くまで辿り着くと、その入り口にはたくさんの兵士、もとい傭兵達が群がつていた。

宿の角で身を潜める。見ただけでも傭兵達は20人近くいる。
とりあえず、中に入りがいるか確かめないと。

「フェルノ、中に入りはいるかい?」

『うーん、ええーと。いるよ。でも3人裏のほうから出て行ったみたい』

きっと、その3人はワルド、ルイズ、オ人だろ。この任務は数人が目的地に着けば良いらしい、と昨日ワルドが言っていた。

いざと言つときは、数人を囮に使い、他の数人が目的地に行くこともあるだろう。

そして、この任務を受けたのはルイズ、その使い魔才人。そしてその護衛というかなんというかのワルド。

そうとなれば、ここにいる傭兵を倒したほうがいいだろ。いくら、囮だとしても仲間が傷つくなはないしな。

杖を取り出しブレイブを唱える。

傭兵達に近づく。

ある程度近づいたところで傭兵達が気づく。

「ああ？なんだお坊ちゃん？今取り込み中なんだよーあっち行ってな！」

あっち行けと言つわざにこっちに突っ込んでくるのはどうかと思つ。

そして
「めん

魔力を目と腕に集中させる。

まず、向かつてくる一人を殴り気絶。

それから、通常の状態で傭兵達に向かつて走る。

何人かはこちらに気付き、攻撃をしようとするがその動きを田で捉え避ける、とにかく避ける。

そして、隙あらば殴り一発で気絶または戦闘不能にする。それを繰り返し、ものの数分で傭兵達を残り一人まで倒す。そこから少し実験をする。

残りの一人は離れたところで僕を警戒している。

剣を構え、こつちが動けば切りにくるという雰囲気を出している。僕は足に魔力を集中させる。そして、一直線に相手に走る。これは愚かな行動だ。

しかし、途中で自分の足の魔力を爆散させる。

そうすることで、予測していたより早く自分に到達した敵を戸惑い傭兵は動きが一瞬止まる。

その一瞬を見逃さず、僕は顔を殴つた。一番気絶しやすそうだったからだ。他意はない。

宿の中にいたはずのギーシュ、キュルケとタバサがもう店の前にいる。

そちらに向かいながら、まるで何もなかつたかのようにキュルケが話しかけてくる。

「助かつたわ」

その一言だけで僕は救われる。

「いやあ、すゞいじやないか」

その一言で僕は自信を持つてゐる。

「おかげり」

その一言で僕の居場所ができた。

三人に迎えられ、僕はまるで今戦場にいる感覚を忘れていた。

そのときである、地面が揺れた。

そして、後ろを振り返ると宿の外には一体の巨大ゴーレムが立っていた。

これは、絶対にあのフーケの物だ。直感で分かる。

そして、そのゴーレムの肩に乗っている人物がいる。

「フーケ！」

ギーシュその人物の名前を呼ぶ。

みんなが驚いているが、キュルケとタバサは理解したようだ。

「取引をしないか？」

僕は大声で彼女に話しかけた。

取引、等価交換。なにかを差し出し、そして何かを得る。

「はん！条件にもよる！」

あくまで気が強い女を演じるらしい。

「見逃してやる！」

そう、見逃す。今の僕達ならフーケを捕まえる事は簡単だ。だからこそ成り立つ取引だ。

「そんなの条件にならないね！」

そう言い、フーケはゴーレムを一步僕たちに近づける。

ゴーレムは所詮岩、その表面は非常にでこぼこしている。上の事は容易である。

ゴーレムが僕たちに蹴りをかまそつとしてる。全員で散り、目標を定めさせないようにする。そして僕はその間にゴーレムの後ろに向かう。

そこから、身体強化を施しゴーレムの表面を走る。

肩を上まで辿り着くと、そこにはフーケがいた。いつぞやかと同じシチュエーションだ。

「またあんたかい！」

そうして、フーケは杖を振り、鍊金を唱える。

ゴーレムの身体から拳が生えてくるが、その拳を刀で切り裂いていく、

そして、最後の足掻きとして彼女は杖で僕に飛び掛つてくる。しかし、その攻撃すらも僕によつて無効化される。

杖を刀で弾き、杖が遙か下の地面に落ちる音がする。

その後、まいつたといわんばかりに彼女は両腕を上げ、降参を認め る。

そして、ゴーレムを解除し、ただの土に戻つていく。

「つたく、私もやばいやつに狙われたもんだよ」

そつ、毒づき僕を睨んでくる。ちよつと睨まないでくださいよ。

「で、フーケ。なんで君は僕たちを襲撃した？まさかと思つけどア
ルビオンとか関係ないよね？」

そう、そのまさかである。そうなれば、この任務自体がすでに失敗
なのだ。

内部から情報が漏れていますで僕たちは危険にさらされています。

「ふん、アルビオンなんて知らないね。ただ、頼まれたんだよ。あ
んたらをここで足止めしあつてね」

足止めと言つからには依頼主はここで倒せるとは思つていなかつた
のだろうか？

それなら、僕たちの実力を知つていてる誰か？
でも、このタイミングで僕たちに襲撃したのなら、たぶんこの任務
は相手にばれています。

「そつか、分かつた。解放だ、逃げてください」

そして拘束を解く。

「な、いいのか？ここで私を逃がして？言つておくがアタシはまた
盗むよ？」

彼女だけじゃない、ギーシュも驚いている。

「取引ですつて言つたじゃないですか？それにフーケ、君は誰かの
ために盗んでいるのだろう？」

「なつ、なんのことだい？」

明らかに動搖していますね。分かりやすいわかりやすい。でも、よくこんなので盗賊やつていられたな。

「あなたの田はとても優しい」

そう言つて彼女の瞳を見る。

その瞳は、世の中の犯罪者の腐つた田ではない。

誰かのために、罪を犯すときの田だ。誰かに助けて欲しいと言つて

いる様な田。

「さあ、行つてください。僕の気が変わる前に

そつ言つて、フーケは闇に消えていった。

「さあ、どうする? この作戦は失敗だね

みんなに振り返り一言告げる。

「なぜだい? 半数目的地に着けばいいんだろう?」「ギーシュが疑問に思つていいようだが、それは違う。

「すでに、この任務は外部に情報漏れしている。目的地に敵が潜んでいる可能性が高い」

たぶん、お姫様から貰つた手紙や、お姫様の手紙を奪うのが目的だろう。

そして、遙か上空、アルビオンのあるある方向を眺める。
願うは友の無事。ただ、それだけだった。

服が引っ張られた感じがする。その方向、斜め下を見てみるとタバ
サがいた。

「行きたい？」

彼女は静かに聞いてくる。

聞いてくるあたり、彼女は自分で行く気はありませんいようだ。
行きたいのであれば「行く」と言つはずだ。
しかし、彼女が聞いてくるのだ。きっと、期待にこたえてくれるは
ずだ。

「行きたい。才人が心配だ」

強い意志を持つて答える。

自分の本心、本当に願っている事。

「・・・分かった」

彼女は少し僕のことを見つめたあと、頷き口笛を吹いた。

そこに現れたのは一匹の蒼竜。
タバサの使い魔、シルフィード。

「乗つて、追いかける」

短く言つたタバサは自らシルフィードに乗り、命令を『』える。

それから僕、ギーシュとキュルケの順に乗つていく。

そうして、シルフィードが大きく羽ばたき、地面に風が押し寄せ土煙があがる。

暗い夜の中を飛び立つ。

才人・・・無事で居てくれ。

僕はもつと、君と話したいんだ。

君の世界に興味がある。魔法のない、全員が平等な世界。

僕も連れて行つてほしい。こんな世界僕は嫌だ。

そんなことを考へてゐるとき頭の中に響いた。

・・・そんなんじゃだめだよー・・・

シリアの言つたその言葉の意味を、今の僕は理解できないままだつた。

第1-3話～存在を巡つて～（後書き）

なんだか、最近ケティを書いていない。でも、どうやって登場させるか迷う。

なにか書いてほしいシチュエーションとかがあれば感想にください。番外編とかで書く参考にするかもしません。

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

第1-4話～愛しています～（前書き）

今回も割りと短めかもしね。やつぱり、原作キャラ視点から書くのが大変だと感じる。たばうん、自分で作ってないからだと思う。というか、そうだろう。まあ、そんな苦労を感じても書いてみました。

第1-4話～愛しています～

第1-2話～愛しています～

SIDE才人

俺たちは今アルビオンの城、ニューカッスル、にいる。

俺たち（俺、ルイズとワルド）はキュルケ、ギーシュとタバサ、そしてどこに行つたか分からないルーラを団に使い桟橋に向かつた。そこで船に乗り、アルビオンに行く予定だつた。そして、その目的は途中で何度かの妨害を受けたが達成できたのだ。

この城にはまだ王党派の貴族達が数百人籠つている。

そして、今。まさに今、彼等は最後の晩餐を楽しんでいるのだ。

最後の夜くらい楽しく、華やかに。そして 明日名誉ある死を・

まちがつてる。

死ぬのが名誉なんてそんなことあつちやいけない。
生きていてこそその功績。

生きていてこそ果たせる使命。

死んで手に入れる名誉なんてなんお意味もない。

誰も理解してくれない。

なぜ、生きようとしているのか。

死んで手に入るものなんて一つもないのだ。すべてを失うだけ。

ルーラなら分かってくれるだろうか・・・

自分の一番の理解者を思い浮かべる。

他のやつらとは違う。

少し頼りなさそうな雰囲気の親友。

でも、やるときはやる親友。

俺のことを一番に考えてくれる親友。

何度も・・・救われた。

話し相手になってくれるだけで自分の不安が紛れた。

母さんはどうしているだろうか・・・

あっちの親友達はどうしているだろうか?

俺の後ろの席のやつはどうしているだろうか?

だんだん、記憶が薄れしていく中、俺はずつと不安だった。

今だつて、不安だ。でも、今はやるべきことがある。

死なせたくない・・・

生きて会わせたい、会わせてやりたいんだ。

俺はまたウェールズのところに向かうこととした。

「デルフはやめろやめろ言つてはいるが、やめない。俺は最後まで俺でいる。」

そして、ついたのは城の一室。ウェールズの部屋だ。

ノックをするとすぐドアが開く。

「来ると思つたよ」

そう、静かに微笑んだウェールズの顔には、不安も、恐怖すらなかつた。

い、やのひな 田んじ 洋々しに笑顔か
か

「なんでつ！」

その時点では俺は分からなくなっていた

なんで笑顔でいられるんだ！明日死ぬ運命なのに。

「ふふ、まだその事で悩んでいたのかい？もう、いいだらつ？悩んだって意味のないことだ」

「いみの・・・ないこと? 何言つてんだよ! お前等おかしいよ! なんでだよ! 明日死ぬんだぞ! 生きるか死ぬかの問題なんだぞ!」
俺は分からなかつた。そして怒つていた。それも分からぬ。何にイラついているのかも分からぬ。

でも、吐き出さずにはいられない。分からぬことだらけだ。

「それでも・・・だよ。僕たちには此処で死ぬという役目があるん

だ。それをやらなければいけないんだ。それしかないんだ
今度は少し悲しく囁いた。

「なんだよ役目って！人のが死ぬ事なんて役目じゃない！なんで生きようとしないんだよ！」

「君は違う世界から来たからかもしないね……なら、君はるべきではないんだ。分からなくていいんだ」
俺を見て、優しく微笑んだ。しかし、その目に悲しみがあることに俺は気が付いていた。

「そんなの関係ねえ！姫様だって、お前と会いたがってるー死んでほしくないんだよ！」

「…………そんなこと……分かつてている」
表情が一瞬歪む、そしてすぐなおる。
その一瞬の変化は一つの事をあらわしていた。
ウェーハルズも姫様と会いたい。

「なら、なんで会つてやらねえーお前も会いたいんだろー！」

「…………それはできない」
ウェーハルズが俯く。

「なんでだよー！」

「なんでもだ」「
きつぱり言われた。
無理だ、と。

「説明になつてない！」
それでも、分からんんだ。
俺には、何一つ分からない。

しかし、次の瞬間ウェールズは発言ではなく、行動でその感情をしめした。
ウェールズは俺の胸倉を掴み、勢いにのせて俺を壁に押し付けた。

「なら！君はどうする…」
その声に乗っているのは怒り。

「君が生きて愛するものに会つたときには、その愛するものを傷つけるとしたら！彼女の一番大切なものを傷つけるなら…」

「な・・・なにを」
行き成り、怒り、いきなり言われて意味が分からない。

「僕だつて会いたいやー会いたくないわけないだろう！なぜ、分かってくれない！」

「分かんねえよ・・・分かんないんだよ！・！」
俺も声を荒げる。

「何も分かんねえんだよ！・！」

その言葉で、ウェールズは腕の力を緩め、俺の圧迫感がなくなる。
そして、静かに俺に説明してくれる。その結末を。

「もし、僕が生き残りトリステインに行く・・・亡命してしまった
ら。貴族派の標的は次はトリステインになってしまつ」
静かに、そして俺の瞳を覗きながら。

「アンの一一番大切なものの・・・それはトリステインだ。それを傷つ
ける手助けになつてしまつのだよ・・・僕の命は。だから、ここで
絶つ」

そして、最後に「分かつてくれたかい？」とたずねて、その答えを
聞かずには自分の部屋に帰つていった。

俺は一人その場に取り残された。

時間からも隔離された気分。
世界からも隔離された気分。

ここは・・・俺の世界じゃない・・・

実感したよ・・・

そして、分かつた。ルーラ、お前がどれだけ俺のことを考えてくれ
たのか。

俺たちが城の着いたときはすでに敵の攻撃が始まっていた。
戦の臭いだ。物が焼けて、人が死ぬ臭い。

「これは・・・」

みんなその攻撃を見て放心する。

今僕たちは一つの国が滅ぶ姿を見ているのだ。

たぶん、サイトたちは城の中だろう。

ただ、僕は友の無事を祈った。

しかし、たぶんそれだけではダメなのだろう。
自分でほしいものは自分で手に入れろ。心がそう訴えかけてきた。
それからの僕の行動は早かつた。

「先に行つてる」

そう、短くタバサに囁いておく。

魔法使いの戦には竜騎士が絶対いるといって過言ではないだろう。
なんといっても空にいる事で戦の全貌を見渡す事ができる。
そして、空は至って安全な場所だ。
しかし、ドラゴンを飼いならす事ができるのは少数なのでその数は
多いものじゃない。

『フェルノ、竜はいるか？』

その位置を把握すればそいつらを足場に大陸までいけるだろ？。

『んー、あっちー』

フェルノが答えたのはあっち、と言うあいまいな方向だったが、使い魔契約を交わして意思疎通のルーンを刻んだからだろうか。その位置は明確に伝わってきた。

そして、足に魔力を溜めて、一気に跳ぶ。

「「え？」」

二人が若干なにが起こったかわからっていないようだ。

そしてフェルノの言つたとおり跳んだ方向にはちゃんと竜がいた。

その竜に着地すると、乗つっていた騎士が驚き一瞬動きを止め、その瞬間を見逃さずに僕は杖を突きつける。

「城までお願いできるかな？」

笑顔でたずねたところ、相手は「コクコクとそれを了承してくれた。

そして、城に近づいたところでもう一度跳ぶ。

大陸の端に建てられた城を見ると、割と逃亡しやすいように作つたんじゃないかと思う。

城の壁に近づき、ブレイドを唱え切り刻む。

そして、城の中へと進入する。

『フェルノ、才人はどっちだ』

『んー、教会っぽいところ』

フェルノが教会という単語を知っている事に驚くが、そこはまず置いておく。

『方向頼む』

そして、それから心の中で会話をしながら目的の教会らしく場所に辿り着く。

僕が入った時にはもうすでに勝負は決していたようだ。
床に這い蹲るワルド、そしてやつの腕。

そして、剣を持った才人と、氣絶しているルイズ。

そして、ワルドは逃げていった。

「才人、無事だつたか」

その人物を見て、俺は安心した。
俺の大変な親友だ。

「ルーラー！此処まで来てくれたのか？」

「僕だけじゃない、他のみんなだつて來てるよ

フュルノの情報によるとみんなはギーシュの使い魔を使い地中からこっちに向かっているらしい。

なぜ、こっちだと分かったかは不明であるが。

そんなことを考えているうちに、教会の端のほうの地面が膨れ、そしてそこに穴が出現した。

そこから顔を出すのはギーシュの使い魔のでかいもぐらだった。

「やあ、才人。色々大変そうじゃないか?」

そつ、言つて顔を出すギーシュ。

早く来い、と手で僕達を促す。

そんなときである。

「う・・・

うめき声が微かに聞こえた。

その発生源は高貴そうな服を着込んだ男だった。

あきらかにこっちを見ている。

僕は才人に先に行つておぐよつと言つ、その男に近づいた。

「あ・・・ありがとう」

男はもうすぐ死んでしまうだろう。

でも、最後の力を振り絞り話しかけてきた。

「いや、僕に出来る事なんて何もありません」

そう、実際この人が救つてくれと頼んできたとしても僕にできるこ

ではない。

確實にこの人はここで死ぬだろう。

「いい・・・ただ、最後に・・・」ふつ

そして、血を吐く。

傷が深い・・・もつて数分だろう。

「最後に言うことか?」

この場面で定番なのだろうか。
思い浮かべるのは遺言だった。
何か残したいのだろうか。

「これを・・・届けてくれ」

そして、差し出されたのは一枚の封筒だった。

そこには、『私の最愛のアンリエッタ』と名付けられている。

「分かつた・・・その頼み、僕が絶対やる」

そして、両手を彼の目に当て、閉じる。

「安らかに、寝てくれ」

そして、その男 ウェールズ は息を引き取ったのだった。

最後に、安心しきったような笑顔で死んだその男を僕は忘れないだろ。

彼を最後まで突き動かしたのは、愛。

僕も急いで戻ろうとするが、地面が大きく振動した。
そのおかげで教会が崩れ始め瓦礫が落ちてき穴を塞いでしまった。

『ちい、フェルノ。大陸の端は?』

そうして、またフェルノの指示によつて外に出る。

もう時間がないのだ。

一か八かの賭けで僕は思いつきり

飛び降りた。

アルビオンは別名白の国と呼ばれている。

その由縁はアルビオンから落ちてくる水が大陸の下で霧状になり白くなるからだ。

そして、飛び降りた僕は大陸の下にいるわけで、視界が全くといって良いほどきかないのだ。

指を口に挟み思いつきり吹いた。口笛　　これが僕の賭けだ。

届いてくれ！

結局、彼は戻つてこなかつた。

でも、死ぬ気はないだろつと予測できる。

なぜなら、彼にはそれだけの技量と覚悟があつたからだ。

どんなときでも生きようとする。

嫌われようとも気にしない精神力。一般的に言つメイジではない。

私たちは今空を飛んでいる。

もしかしたら、彼が穴から飛び入り手来るかもしれないと期待しているからだ。

「る、ルーラは！」

後ろで騒いでいる使い魔はキュルケとギーシュが静めているが一向に静かになる様子がない。

「つるさい」

静かに、でも少し威圧するような感じで言い放つ。

その直後だった。

行き成りシルフィードが方向転換をしたのだ。

そして、私の言うことを聞かない。これはいつも通りなのだが。そして、白い霧の中に突つ込んでいった。

「うわっ」

前のほうで声がする。

聞き覚えのある声。

そして、白い霧から抜けるとシルフィードの口^{くち}、マントを咥えられぶら下がっている彼がいた。

「あ、ありがとう」

少し声が覚えていたがたぶん高さのせいだろう。

「おかげり

小さく言ってみた。

SHDEOUT

なんとか賭けには勝つたようだ。

僕は今シルフィードのおかげで生きている。

と、言つてもわりと危ない状態だ。ぶらさがっているのだ。

シルフィードが口を開ければ僕はすぐまた落ちるだろう。

そんな心配をしながらも僕達はトリステインの王都につきその城の庭に降り立つた。

まあ、そこで色々疑われたりしたが、そこはお姫様がビリビリかしてくれた。

そして、今僕はそのお姫様の前にいる。

「どうしたんだよルーラ？早く戻^{もど}り^せ」

帰ることを促す才人。

「何やつてんのよ！早く姫様から離れて！」
相当僕のことが嫌いなルイズだ。

「まあ、待て。僕も用事がある」
そうして、手紙を取り出す。

「貴方がアンリエッタで間違いないよね
まあ、合っているだろ？が確認に越した事はない。

「はー・・・

もうすでに落ち込んでいる状態だ。
もしかしたら、この手紙も落ち込ませるかもしれない。そんな不安
も一瞬よぎった。

しかし、それでも約束は果たす。

「この手紙を預かった」

そして、その封を切り読み始めた、と思つたら泣き崩れた。

「うう・・・ん・・・ひっく」

そして、その涙を懸命に腕で拭い取ろうとしている。
しかし、その涙が僕に見せたもの、それは悲しみ、寂しさ・・・そ

して、一時の喜びだった。

その手紙を拾い上げる。
そして、その内容を見た。

一文だけ、そこにまづづつてあった。
この世で一番嬉しい言葉だらう。

愛しています

そして、それで手紙は終わっていた。

手紙をおりなおし、彼女の手の中に收める。
そして、その部屋を退出する。

「ほら、行くよ才人。ついでにルイズも。僕達はお邪魔だらう」

ルイズがついでの部分引つかかったようで文句を言ってくるがそんな事気にする気分ではない。

あんなものを読んでしまったからだろうか、早く会いたい。

早く、戻るんだ。

僕は生きながら書いてあげよう。
こんな悲しみ味あわせない。
心に誓つた。

そうして、僕達の旅は、終わりを迎えたのだった。

第14話～愛しています～（後書き）

なんと、お気に入り登録が100人を越えました！今までありがとうございます。そして今からもよろしくお願いします。

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1784m/>

イチの魔法使い

2011年5月1日02時45分発行